

北海道書道展特集座談会

第20回北海道書道展記念座談会（1979年） 1 ページ

テーマ「歩んできた道、これからの道」

松本春子、石田栖湖、渡辺緑邦、佐藤大朴、金丸梧舟、宇野静山、島田無響

第25回北海道書道展記念座談会（1984年） 7 ページ

テーマ「諸問題を克服、大きくジャンプ!!」

小川東洲、藤根凱風、島田無響、平田鳥閑、千葉軒岳、大川壽美子、中川清風

第30回北海道書道展記念座談会（1989年） 13 ページ

テーマ「北海道の書への期待について」

中野北溟、木村和男、工藤欣弥、佐藤庫之介、細谷猛、中野層翠

第40回北海道書道展記念座談会（1999年） 21 ページ

テーマ「北海道書道展の明日を語る」

青木空豁、清兼吼、越坂久雄、佐々木信象、千葉和子、矢野鴻洞、辻井京雲、中野層翠

第50回北海道書道展記念座談会（2009年） 27 ページ

テーマ「北海道書道展の存在意義とその魅力～普及と隆盛に向けて～」

河原啓雲、成田成峰、川口吟子、鈴木大有、湊天邦、小泉和雄、阿部和加子、羽毛蒼洲

第60回記念北海道書道展座談会（2019年） 35 ページ

テーマ「時代に生きる北海道書道展の方向性～未来に繋がる書道文化の展望～」

本間太洲、松永律子、菅原京子、大川一濤、上戸抱山、野坂武秀、越坂久雄、石原北陽

第20回北海道書道展記念座談会

歩んできた道、これから之道

北海道書道展は第20回展を迎えました。第1回展は数百点の応募に過ぎなかつたのですが、最近は約2,000点の応募があり、内容も充実して、全国からも注目を集めます。

そこで、昭和35年、北海道書道展の創立のころ、書道誕生の苦しみと喜びを体験した6人の創立会員に、当時の思い出話や現在の書道への要望などを率直に語りあってもらいました。題して「歩んできた道、これから之道」です。なお現在、東京在住の石田栖湖先生はお忙しい中を、この座談会のため、わざわざ来られました。

とき 昭和54年2月14日 15:00

ところ 東急ホテル

<出席者> (発言順)

北海道書道展会員	松本 春子
石田 栖湖	
渡辺 緑邦	
佐藤 大朴	
金丸 梧舟	
宇野 静山	
島田 無響	

島田 さて本題に入ります、道書道展の創立のころから

松本 一番古いのでは、昭和12年2月、北海道書道協会が出来た。これが、昭和35年ごろでしょうか、北海道書道連盟に発展的に解消しました。

石田 いや、ちょっと違うな。

渡辺 道書道連盟のルーツというわけだね。

石田 20年というと相当昔の話になるなあ。連盟の創立はそもそも展覧会とは無関係だったんじゃないかな。私が病気をしていた25年ごろ、加納守拙先生が訪ねてきて話が出たように思う。あのころはちょうど日本書道連盟が結成された頃で、私は寝ていたのでくわしいことはわからなかったが、なんでも加納先生はとにかく書道界の足元をまず固めろということだったようだ。知事を引きずり出そうとしたら、役人を呼ぶのは反対だなどという声が出たりしてね。連盟の事業は特別

になく、なんでもいいから集まってくれる話でもしようということだった。人事もなにもしない、どこかの学校を借りてお互い勉強しようやという程度のことだった。

渡辺 北斗高校だったね。

佐藤 25年ぐらいも前の話だからなあ、私の記憶と大分違うようだ。記録でもあればいいんだが……。ともあれ、私の記憶では連盟の創立は30年ごろだと思う。書道界が群雄割拠でまだバラバラの時代だった。連盟結成のとき定山渓で2回ぐらい会合をもった。いろいろの案件があって、石田さんの規約などをみた記憶もあるが、その定山渓の前2、3回の会合があり、定山渓でその話を詰めたように思う。定山渓にはみんな集まつたわけでなかった。渡辺さんに背中を洗ってもらったことを覚えているな。ところが、話し合いの中で規約や人事問題を持ち込むのはうまくないと主張した人がい

たりした。あれは西創成小学校だったと思うが、議長が藤田喜一さんでね、結成スタートの間際で大論戦が起り、結局は連盟はいかなる事業もしない、とにかく親睦を目的にしようということを申し合わせた。仲間が集まっただけだから懇親しかないわけで、この状態が2、3年続いたと思う。いずれにせよ、これが大同団結のはじまりだった。しかし、2、3年続いたところで、これなら何か事業を出来るのではないかということになった。親睦だけじゃもの足りないという機運が出てきてまず講演会をやった。北斗高校だったと思う。やがて書の研修会もやるようになり、展覧会に結びついていったわけだ。

渡辺 大朴さんの話も当たっているところと違うところがあるな。戦前、戦後を区切った方がわかりやすいよ。戦後、最初に出来たのが金丸さんたちの北海道書道文化連盟の全道展だったね。あれは



いつからだったろう。

金丸 21年からだ。

渡辺 あの全道展は全道から作品を集めたいい展覧会だった。しかし、それにあきらまないというグループが出てきて北海道書道協会が結成された。松本春子さんやご主人の松本剛太郎さんらがメンバーでね。

松本 それが昭和12年なんですよ。

渡辺 いやいや、前との結びつきはなかった。確か25年8月に第1回公募展をやっている。

松本 24年にあったのはなんでしたでしょう。忘れてしましましたが、清水まさ子さんがいいものを出していたのを覚えてています。

渡辺 道文化連盟展じやないですか。

佐藤 道文化連盟が発足したのが21年ね。

渡辺 その全道展と並んで道書道協会展も盛んになってきて、第3回展は三越でやった。これはよかったです。ところが、その協会も幹部の意見が合わなくなつて協会展が間もなく終止符を打つんだが、それを引き継ぐ形で僕の会を作った。北海道書道会だが、これが2回展までやつている。道内書道界が2つにわかれる状

態だったわけだが、やがてわかれケンカするのはよくないと呼ばれるようになり、32~33年頃だったと思うが仲良く一つになったわけだ。まとまるのに2年かかったのだが一本化して北海道書道連盟になった時は藤田先生が中に立ち、確かに中央創成小学校で旗揚げしたように記憶している。

佐藤 道書道連盟の結成が34~35年ごろだとすれば、道展第1回展と同じ時期ということになるんだが……。

石田 ブランクがあるんだよ。何もないという時期がネ。



金丸梧舟氏

載っている。その規約作りは私と石田さんが受け持つた。打ち合わせの際私はいろいろ細かく書いてきたが、石田さんのはきわめて簡単。規約は主として石田さ

んの原案が基になった。加納先生のお宅で決まったんだね。それから33年だったか開道90年で展覧会をやったところ意外と昔のメンバーがそろった。

佐藤 会場はどこだった。

金丸 中島公園だった。それ以前に旭川でも一ぺんやっているし、これで展覧会の見通しがついた。34年秋に鈴木翠軒先生を歓迎した際も「ボツボツ仕事してみたらどうだ」ということになり、11月18日現在ですっかり展覧会の話は固まった。それで協会と文化連盟、教育書道連盟の幹部も対象に30人の理事を選んだ。

石田 そういうことになると、ボクはさっぱり覚えていない。

宇野 日誌を調べたかったが、手が回らなかった。32年1月何日かに連盟の初会合の記憶があるが、あまり確かでない。

金丸 ところが理事選にもれた人たちが不満だ。今までそれぞれの会の幹部だったんだからね。これには困った。連盟事務局長だった石田さんが矢面に立たされ、34年12月31日の夕方、西創成小学校の校長室を借りて相談した。藤田さんが中に入ってくれてね。その前に反対派の人が大きなビラを印刷して全道に回し、選挙はインチキだとか大変な騒ぎだつ

た。

佐藤 ああそうか。あれは展覧会の話だったのか。それは思い違いだった。

金丸 34年11月18日付の道新に藤田喜一の名で連盟が正月早々展覧会をやるつてことをはつきりうたってあるし、もうほかに手段はないということで事務局長が辞任することになった。選挙の責任をとったわけです。何も悪いことはしていないのにね。これで危機を切り抜け、ボクにやれというのでボクが事務局長代行になった。しかし、会場設営にしても審査にしても仕事してくれるメンバーがいなくなってしまった。若手を激励してやっと乗り切ったものです。



島田無響氏

島田 まあ、いろいろいきさつがあって、30~35年の間に連盟が親睦団体として出来上がり、その中から何か

をやろうという機運が出てきたということですね。展覧会をやるために人が集まつたのではなくて。

石田 そう、展覧会の方が自然発的に出てきたということだな。

島田 なるほど、それで道新と共に第1回展が開かれたわけですが、何点ぐらい集まつたのですか。

金丸 反対派は出さなかつたし、期待したほど集まらなかつた。300点ぐらいだつたと思う。

渡辺 ボクは600点ぐらいと記憶しているが。

佐藤 300点ぐらいだろう。

島田 私は5回展からお手伝いさせてもらっていますが、そのころ600~700点でしたから第1回は300点程度かもしれませんね。

島田 去年は1,800点を上回ったのですからずいぶん増えたものですね。

宇野 ボクの時代に1,000点ぐらいに何とかしたいと思ったんだからね。実際に集まってきたのは800点ぐらいかな。それから考えても1回展は300点程度だろうな。

金丸 発足当時は日和見が非常に多いものなんですよ。

渡辺 そうなんだ。ボクらも道展第1回展以前に毎年何らかの形で全道的な展覧会をやってきていたんだが、第1回展にはほとんどおさえてしまった。なんていうか、内容がわからんから、ようすをみようとー。

金丸 そういう心理が働きますね。

佐藤 審査はみんなでやつたんだつたろうか。

一同 みんなだつたね。

島田 道新と共に成了った経緯についてはいかがですか。

渡辺 なんといつても人事問題ですよ。

金丸 渡辺、石田両先生が道新と折衝したんでしたね。

石田 連盟の責任のがれに道新を巻き込んだといつていいくでしよう。(笑)

金丸 道新主催になったのはいつからでしたつけねエ。

島田 小川東洲さんが第5回展で大賞をとっていますがー。その時からでは…

金丸 大賞、準大賞が出来たのは第4回展からですよ。



宇野静山氏

あつたね。

渡辺 あれはあとですよ。第5回展じやなかつたかな。

宇野 とにかくよくもめたねエ。

渡辺 大朴さんと僕が延々40分ぐらいやり合つたこともある。大朴さんも元気よかつたな。

佐藤 オレが悪いように聞こえるが、その前にオレだって相当ひどいことを言われているんだよ(笑)。とにかく審査でもなんでも声の大きいものが中心になつて、最後の場面で声の低いものがまとめ役だった。石田さんなんかズルくてモノを言わないんだ。さんざんやりあつた挙句、最後に石田さんのひとことで決ました(笑)。なにひとつやるにも初めてだったから、そりやあ大変なことだった。根回しの苦しみなどね。今ではスイスイ行つてるようだけど、もっと活発な論戦も欲しいような気がする。

島田 私も記憶にあります。こっち(審査会場外)の方まで聞こえる大きな声はほとんど大朴先生と渡辺先生だった(笑)。10回展、11回展のころが最も大きな声が聞こえましたね。

金丸 運営委員問題で苦い経験がある。委員が札幌市内だけだったので、小樽の宇野さんを加えようとしたらこれが決まらない。授賞式の前の総会でもめちゃつてテンヤワンヤ…。

渡辺 本当に大変だった。しかし、みんな私心がなく、道書道展をどうするかで議論を尽くした。

石田 そうだネ。議論のあとも尾を引くようなことはなかつた。

佐藤 確かにみんな仲は良かったヨ。

島田 第1回展は12~13人の先生方で合同審査なさつたわけですが、手うすといつてはなんですが、やはりそういう事情から新会員10人を推挙されたのでしょうか。

渡辺 いや、全道的に公募の範囲を広げようということから、主な指導者が抜

けていちやまずい、網羅しようという考えだったと思う。

石田 すそ野を広くする意味だったな。みんなそれぞれ一方の雄だから。

金丸 最初反対していた書道教育連盟の実績ある人々も平和的に仲間に加わってくれた。そうなると、審査も特別選衡中心から大賞制度に重点を置くようになった。

島田 10回展には特別選衡がたくさんありましたね。10人中5人が特別選衡です。11回展は2人に減っています。

松本 道新のホールを拝借したのは何回展でしたかしら。

島田 9回展です。

金丸 あの年の作品は実に素晴らしい。美術館に残しておいたら一と考えたくらいだから。

松本 43年ですよね。主人（松本剛太郎氏）が亡くなった年なのでよく覚えているんです。二会場になったんです。それにしても早いものですね。

渡辺 早いねえ。

島田 本当に満19年ですから。さっきもいったように発足の年に生まれた人が去年入選している。今年は何人出てくるか楽しみですね。

宇野 公募の人が審査員になったのはいつかな。

島田 最初は第4回の柴田保子さん、金丸蘇洞さんの二人。

宇野 内規で大賞をとった人は次の年当番にならないことになっているため問題になったように覚えているが。

金丸 それはもっと後の話ではないのかな。はじめは会員になつたらすぐ審査に当たつた。宇野さんが委員長になってからではー。

島田 推薦でなつた人はいつまでも当番が回つてこない。それが問題になったことはあるが、13回展から改善された。ところで第1回展で中学生が第4部の第1席になりましたね。

松本 その中学生はその後、どうなりましたかね。

佐藤 ああいういいのをとると、たいてい伸び悩みになる。

松本 将来伸びると太鼓判押してらっしゃったでしょう。

佐藤 それをいうために…（笑い）。少し早過ぎるという声もあったが、ズバ抜けて良かったのは確かだ。

金丸 そういう印象だった。ただ中学生が第1席で先生が入選したとかしないとかではずかしいと、ある校長先生から非公式にどこかに申し入れがあったそうで（笑い）、そんなこともあって2回展から年齢を18歳以上に制限した。

佐藤 彼は加納さんの教え子だった。加納さんがいなくなったらピタッと止まった。

松本 もう1人上手な人がいましたね。高校生で。

佐藤 橋口悌佑（雅山房）。東京にいる。あれはやっている。

石田 だれのところで。

佐藤 墨人に所属してる。

金丸 似たようなことが文化連盟時代にもあった。師範学校の学生が知事賞に選ばれたがやっぱりその後うまくなかつた。

佐藤 素質があつても、賞をもらつてオレが一番だなどと甘く考えると堕落が始まると。

金丸 知事賞の人は小川東洲の同期生だったが今はダメになった。

佐藤 賞をとらせるることはいろいろ考えてみる必要がありそうだ。

島田 中学生についてはやる気があつたと思います。ボクらがクロの会というのを作つて2年ほどやつたことがあるんです。よく出席していました。

松本 本当に伸びて欲しかった。

島田 生むのも育てるのも大変ですね。

石田 いろんなことがある。函館の



石田栖湖氏

青山流杖が、北海道書道展の役員にならなかつたので、「北海道展は中央展より上か」って電報と速達の両方よこした。

佐藤 あれはネ、ボクの返事も悪かつたらしい。苦労したナ。

渡辺 誰のところにも電報と速達をよこすんだな。

金丸 ちょっと変った前衛だった。

島田 5回展に委嘱になってますよ。ところで上田桑鳩先生も北海道にはづいぶん足跡を残してますね。

金丸 札幌市内に門下生はいないというので、ボクがただ文部省の試験を一緒に受けたよしみで、北見に行く途中、一席設けたことがある。

佐藤 21~22年に北見で書会をした。お嬢さんが上湧別へお嫁に行ってね。

渡辺 金丸先生のお宅に呼ばれて上田先生のお話や書くところをみたが、あれは大変な感激だった。22年の秋だと思うな。

金丸 ずいぶん技法を習つた。

宇野 その後だね僕が師事したのは。

島田 いろいろと道展のおいたちを伺いましたが、ここで道展を育ててくれた先輩のみなさん方に今後道展がどう進んでいったらよいのか、忠告やら注文やらといったものをお聞きしたいのですが――。

松本 卒直にいってよくもここまで無事にやって来たものだと思うし、とても喜ばしいことです。会員のみなさんは勉強家が多いし、今までそうでしたが、今後なお一層勉強に励んで中央書壇に負けないような仕事を見せていただきたい。



松本春子氏

中央の展覧会などでもそうだ。なんていうか、ちょうど自民党のようなもので、派閥の連合団体みたいなものになるんじゃないかなという不安ですよ。日展などその典型だが作品の本籍がすぐわかるんだ。これは誰の系統、あれは誰の系統だという具合にね。そういうふうにならないで、むしろ中央と結びつかない北海道独自の発想に立ったものが欲しい。そうでないと惰性になってくると思う。そう考えると20年というのはちょっと長すぎたという気もする。時々はぶつ壊して、サラ地に家を建てるようなこともやってみる必要があるんじゃないかな。家だって老朽化したら壊してしまうでしょう。実際問題となると難しいけれどね。

金丸 いまも話に出たが、確かに類型化の傾向をたどっていることは否定できないな。しかし、いいものはいい。第12回展ごろの新聞記事をみると、評論家が書いているんだが、「中央のまねをするな」「北海道独自のものを」と警告している。そのとおりだと思う。それと、近年つくづく思うことに誤字やらカナ使いの誤りが目立ってきた。石田さんともよく話し合っていたんだが、直らないどころか、ますますひどくなっている。審査の際も時間がなくて、よく見れないんだな。ひどい例では作品の注釈がまちがっていて恥をかいたことがある。運営委員会などでチェック体制の工夫ができないものかね。

ますます発展するよう祈ります。

石田 組織というもの

は大きくなればなるほど難しくなると思うんだ。

だ。これは

石田 誤字の話はムリもない。私のセガレもそうで、何か書くと「それは昔の字だ」という。文字を使っている範囲が狭くなっているんだよ。旧仮名使いなどてんでわかっていない。



佐藤大朴氏

は20年も続いたことだし、今日の話も『原点論議』として考えて欲しいわけだ。つまり、要望したいことは、その『原点』も忘れて新しい人たちで新しい展覧会を作成したいと思うのだ。前に敷かれた路線に乗ることは楽なんだ。そうではなくて若さ、新鮮なセンスといったもので、新しく建設する、楽な路線にスイスイ乗るなといいたい。大変なことだろうがね。それがまずひとつ。もうひとつは、よくも20年も、壊れないでやってきたものだと思う。これ不思議なことですよ(笑い)。絵画であれば全道展、道展、新道展などいろいろあるのにー。政治でも20年になると5期連続ということになり、そろそろ新しい政党を望むように、北海道書道展とは別のなにかを望みたい。ただ、そのときには道書道展審査員をきっぱりと辞めて、これとは無縁の新鮮な態度でやってほしい。注文はいろいろあるが、まずはこの2点だね。

あとは、こんど企画される第20回展を記念して歴史に残るような大きな事業をやってほしい。大賞(グラン・プリ)でも「第20回記念大賞」をもうけるとかね。

石田 20年といえば成人式だからね。

島田 宇野先生からもひとつご忠告な

ど。

宇野 特別なことはないんですがねエ。いずれにせよ、第19回展が過ぎて第20回展を迎えることになった。ここまで来たのも、第1回展から毎年、当事者は回を重ねるごとに少しでもよくしようという意気込みで取り組んできたからです。例えば審査の形式にしても全員審査、あるいは分割当番審査、さらに全員審査というふうに、常に壊しては建設する試行錯誤を繰り返し、苦労を積んで19回まで来たということで、さらに今後もその努力が続くのだと思う。当事者は反省の上に立って改革していくというこの行き方は決して悪くないと思う。過去を振り返って新しいやり方を工夫する、しかも突飛ではなく漸進的にやっていくという方法はこれでいいのだと僕は考えている。ただ、先ほど石田さんも言われたように20回も重なってくると、つまり会が発展してくると、派閥的傾向が強まるというのは避けられない宿命ではないかと思うんですよ。これをどういうふうに改革していくかという問題があるわけですが、理屈ではわかってもいざ現実の問題となると、急にはなかなか解決できない。だから、その意味でいま新しい展覧会の話も出ていましたが、理論的にも成り立ちにくいと思う。しかし、派閥問題は確かに書道界発展のためにはガンであり、避けていくべき問題だ。そこで避けるためにはどうすればよいかということになるが、例えば審査の方法を取り上げてみると、総合審査ばかりでなく、たまにはある一定時期を目安にして当番審査制を採用するのも悪くないと思う。ところが、これがなかなか難しい。派閥解消はいかにもきれいだし、理屈ではわかる。しかし、実際に特選4回をとって(会友に、そして4年後)、ようやく大賞をとって審査員という立場を獲得したのに、さあ今度は当番制ということになると、何年後に自分が審査できるかという

問題が現実に起こつてくるわけだ。それで当番審査制がなかなかできないでいる理由なんだが、ある節（ふし）を考えて織り込むという方法はどんなもんかなあと思っているんです。

石田 僕は宇野さんの意見は非常に稳健なものだと思う。さつきもいったように、出来るものなら、ということだけですね。そのいい例が比田井天来先生だ。総合審査がいかんということで大日本書道を作った。根本にあるのは、総合審査だと、ある人が100点をつけ、別のものが零点をつけると平均して50点になる。ところが中位の作品に2人が60点をつけると、その60点の方が上位になるという不合理が起こるということだ。大日本書道を作った天来先生はたった一人で単独審査を試みたわけだが、結局めんどうになって一年でやめてしまった（笑）。その後連合形式でやつたんだが、それもめ

んどくさくて1年でやめた（笑）。大変なんだなあ。

一同 そうそう。

島田 渡辺先生から何か。



渡辺縁邦氏

前から持っていた目標なんだが、これがどういうわけか、どうしても丸いマリを横に切った上の部分だけみたいになってしまって、マリの下の部分がない。つまり半分欠け状態になるんだ。それは水準の高い層ばかりの作品が出てきて、一般的

的、大衆的な人たちによって近よりがたい立派な展覧会になってしまったのが大きな原因だと思う。現状も20回にしてなお下の丸みがない半欠け状態なのがいかにも惜しい、残念だなあという感じがする。下の半分を考えることがいいのか悪いのかというのも問題だが、僕はとにかく出来るだけ大きいマリに育てたいというのがひとつ。ふたつ目は、気持ちは若干違うんだろうけれど、また宇野先生と逆になつていささか乱暴な話になるんだが、僕も出来たら今の道展をぶつぶして新しいものを作りたいという気がする。どうしてかと聞かれれば説明に時間がかかるので省略するが、正直な心境を述べればそういうことになる。

島田 今日はお忙しい中、どうもありがとうございました。

第25回記念／座 談 会

諸問題を克服、大きくジャンプ!!

北海道書道展はここに25回を迎えるました。本道を代表する総合書道展に相応しく、書道の全分野を網羅し堅実な発展をとげ、公募点数も2,500点を数えて今日に至っております。第20回記念では「歩んできた道、これからの方の道」と題して創立会員による座談会をもちました。道書展生みの苦しみ、育てる喜びに満ちたものでした。今回は発展期にある諸問題をとりあげ、更に大きく翔くために出品者や役員共々考え合う問題提起をお願いしました。これが一つの契機となって本展が更に大きくジャンプしたいと思います。出席者には歴代委員長を代表して小川、島田両氏、地方を代表して平田（旭川）千葉（函館）両氏、女性を代表して大川氏、現委員長と司会は庶務部長にお願いしました。

とき／昭和59年3月30日

ところ／道新事業局会議室

＜出席者・発言順＞

北海道書道展会員 小川 東洲

” 藤根 凱風

” 島田 無響

” 平田 鳥閑

” 千葉 軒岳

” 大川寿美子

” (司会) 中川 清風

中川 今日はお疲れのところお集りいただきありがとうございます。これからの道展をどういうふうに考えていくか。まず大局的な観点から。

小川 僕を含めてどうしてもものの考え方方が主觀的になりやすい弱点をもっている。だから、実現するしないは別として、一つのジャンルをはずして審査をするぐらいの気持ちがほしいな。何回展だったか、忘れましたが、仮名から何から全部審査したことがあった。気持ちとしては画一的なもの、一つの主觀のとらわれからはずれて、どのジャンルでも審査ができるような願いみたいなものもちょっと持っている。具体的にどうしろという要望じゃないですよ。それくらいの気持ちという程度なんですが、どうだろうか。少し、なにかこう、今はぎくしゃくとらわれてきているような感じがするから。

藤根 今、小川先生がいわれたことは理想だと思う。当時は出品数も、審査員も少なかった。だから運営面ではやりやすかった。しかし、今は出品数が多く、審査員も百何人になっている。そして、二日間の日程だ。となると、まず、不可能に近い。あるいは審査機構や組織を変えて、例えば審査員の当番制とか、いろいろな面で変革があるというなら別だけど、それにしても出品数の増加からいうと非常に難しい問題である。

中川 小川先生どうですか、そのジャンルにとらわれないということについて。

小川 気持ちの問題として言ったんだよ。

島田 気持ちとしては非常に賛成なんだ。過去には一人が二部にわたって審査したことなどもあったし、これは違った目でみられて割合によかったと思うよ。漢字の人が仮名を見るとか、結果としては

非常におもしろいものが出てたんじゃないかな。ただ、今は技術的に無理があるんだね。でもね、それは審査員がもう少し若くて元気ならば…。日程を増やすことができないものかね。それからね、(審査員が)百何十名にもなったけど、それは機械化すれば票の読み方なんかもすぐにできると思うんだね。だから、(昔のやり方が)できないことはないかもしれないけれど、今はちょっとね。ただ気持ちとしてそれがあって、その気持ちで審査員がそれぞれ他のジャンルに目を向けるしか仕方がないじゃない。

藤根 形としては全員審査制で、全作品を見るのはベストだ。だが、そういういいけいけれど現実的にはなかなかそこまでいかない。ネックが多すぎて。

小川 出品作品についてね、それらの気持ちをほんとは持ちたい。実際それは僕自身やってるわけだけどね…。理想



的な一つの願いとしてジャンルにとらわれないぐらいの気持ちまでいかないと…。ただ気持ちとして言っただけですよ。

平田 今の問題、基本的には賛成なんですけど、ずっと、私、北海道書道展の流れを見ていると、どうしても審査員は同格なんだという考え方と、審査員と名がつけば毎年審査をしたいんだという意欲がずっと審査員のなかにあったと思う。それが結局、当番審査制か、全員審査制かという論議になってきたと思うし、大賞選衡も選衡委員も選んでやるというより全員でやった方がいいというような、ある程度民主的な傾向が北海道書道展の根っこにあったと思う。それを、これからどういうふうに考えていくかということだけど、私はある時期がくれば、この審査員の人数はほんとに多すぎるということになると思う。こういうことによって弊害が出てくるということも心配している

わけです。それと、基本姿勢とどうからめていくか、これが大きな課題だと思います。



らすれば、特に漢字においてはもう限界にきているということもあるって、60人近い人数で審査するのは大変な技術を要する。これは、現在事務的な処理が割合うまくいっているのでスムーズに進行しているわけで、その点の問題と、今のグラントプリを含めて選衡委員の人数の問題でなにか感じていることがあれば。千葉先

生、如何ですか。

千葉 道展のここ10年くらいの傾向として広く民主的な考え方がある程度定着してきたと思います。公募作品も数多く、審査員もオープンということは、かなり開かれた展覧会になってきつつあるということですね。だから将来も、やはりその視点から見通す必要がある。各部またがった審査制も意味があるし、民主的に全員で作品を見るのも意味がある。その点、どういう方向が一番いいのか。地方での移動展もかなり成果がある。確かに審査員が多いことは大きな問題ですが、逆にそのことによるプラスも一面では十分評価しなければならない。要はそのことも加味しながら審査員をしぼっていく方法に何があるか?なかなか難しいですよ。

中川 もう一方では事務的な処理の問題も高度に要求されてくる。この辺について大川先生ひとこと——。

大川 仮名に限っては今の状態がいいと思います。ただ一部は、審査のお手伝いをした状態をみて、やはり審査員の先生すごく多くて……。いろいろ問題もあるような気がします。

島田 僕は道展の審査員は他の書道展に比べて割合展覧会に対する意識が高いと思う。おれはおれの目でみるという感じがある。他の審査は縦系列が非常に多いでしょう。その点、道展は僕はいいなと考えている。縦系列があっても余り強くないでしょう。

藤根 形はあっても意識の上ではね。

中川 ところで、現在の審査の面では？ 例えば現在のグランプリ制度。グランプリをとつて会員（審査員）になれるんですが、とれない人は会友で10年、15年、20年、会友のままの人がこれから参加人數が増えるほど多くなる。実際、20人前後の会友が毎回確実に増えてくる。そうすると一生会員になれない人もかなり出てくるだろうと予想される。これについて――。

小川 ずい分古い人たちがよく辛抱、頑張っている。僕はこの状態は余り好ましくないという感じがするんだ。

藤根 それは規約を改正すればいいわけですよ。去年規約審議委員会でもその話は出ている。一对多数で否決されているんだ。

平田 なにか記念の時にでもやればいいのでは。

島田 それをやると今度は審査員がふくれてくるんだな。前は推薦制度があったわけですよ。ところがその時は当番制だったから推薦する審査員に当番が回っ

てこないこともある。それが13回展のころから全員審査になった。その辺の処理をどうするか。これは大変な話だよ。



にやると必ず無理がくる。やはり、時期の問題なんだ。

中川 どこかでひずみを是正しなければ……。

千葉 ひずみの認識の仕方もある。ピラミッドの傾斜の角度が大きいのか、緩やかなのか。単に審査会員が増えるのがいいのか？ 僕はただ何年、だから審査員になればいいというものではないと思う。やはりそれなりの書道に対する見識が必要だし、なんたって作品がみずみずしくなければダメだ。

島田 それはそうですよ。何年だから審査員にさせるということじゃなく、推薦制がもしできるとすれば推薦規定、資格というのをちゃんと設けることが条件だ。

千葉 今日の大賞選衡は妥当だし、やはり作品本位でいいのではないか。今までずい分苦労して壁を乗り越えた方もいっぱいいいらっしゃる。基本は余り崩すべきではない。

小川 少なくとも大賞作品ぐらいは各部から出てくる前に審査員が全部でみていくようにできないものか。窮屈な面を

一つはずしていくような……。

島田 それは去年の審査会の席上でもそんな発言があったわけだ。それが物理的な事情でできなかった。ただね、面白いのは、創立会員が大賞選衡委員だったことがあったでしょう。その時は相当でっかい声でいい合いしたもんだ。すっこい声だった。ああいったディスカッションの場が本来は大賞決定の前にあるべきじゃないかという気もするのね。余り冷たく機械的に投票して作品がすっといくんじゃなくて……。

藤根 それはやはり人数の問題もあるんだ。

島田 うん、今の状態では無理な話とは思うが。



小川 さっきちょっとと言おうとしたことだけど、一部からだせばそれを最後まで持つていいたい気になっちゃう。しかし、1部、2部、3部、4部全部かかわって選んでいくと大賞の最後の決でも各部に対する気持ちの配慮、広がりみたいなもの、とらわれみたいなものが一つはずれるような感じがある。その辺のところから各部とか、縦の系列みたいな新旧交替も併せて、とらわれみたいなものを少しきずすように……。

島田 とらわれてないよ。

藤根 それはね、バランスを考えてやる人とか、あるいは作品本位にやる人と

か、自分の部だけに執着する人とか、人によって分かれるのでは。

小川 それはそうなんだけど僕の言わんとしていることは一つのとらわれ……。とらわれるという言葉があてはまらないかもしれないけど…、視界が一点に凝縮していくような感じさ。きわめて抽象的な言い方で恐縮ですけど。

千葉 だけど先生、逆な面もあると思うんですよ。各部の独自性ということだってあるんですよ。その辺のところ、うやむやにしたくない。

島田 だいたい各部というが本来おかしいんだな。本来は部なんかなくして全部集め、ひっくるめて審査するのが一番本筋と思う。

千葉 それは無理だよ。

島田 ちょっと待ってほしい。それが書のなかに一元的に包まれるべきものなんだよ。

千葉 それは理想論だ。

島田 理想じゃないよ。

千葉 そしたら、各作家の力量や見識は各部みんな同じかというとそうじゃないでしょ。やはり1部は1部の作家であり、2部は2部の作家なんだ。

島田 そんなことないかもしれないよ。

小川 そうなってくると大賞の最後の投票の時に一番審査員の多い1部が全部入るはずなんだ。しかし、みんなの配慮のなかで採り上げている。

千葉 自分の得意とする部とそうでない部ってのがやはりあるでしょ。

島田 そりゃありますよ。

藤根 自分の仕事の上ではジャンルがある。自分の仕事と審査の眼とは違うん

だから。



千葉 やはり仕事を通した見方と仕事をしない立場での見方ははっきり違います。

小川 かえってその部にいるものがほんとうに自分たちのことがわかっていない時もある。

平田 どの部にもその部独自の類型というものがあるんですよ。

千葉 今、問題はね、審査員が多くて困るということなんでしょうね。

島田 まだ困る段階に来ていないんですよ。

中川 今、各部の話が出たついでですのでお聞きしたいんですが、現在の5部制についていかがですか――。

小川 去年の審査会議で僕は今の書道展に限界を感じました。4、5部の大賞に入る人が少ないとか――。内容を分析すればいろいろ問題はありますけど。これは僕らの思っている書道展ではないなという……。

中川 現実問題として4部と5部の出品人数が少なくなっている。このことで部としての存在意義を疑問に感じている人もいるのではないか？

平田 少ないからといって解体する気持ちは全然ないんですね。むしろそれを育てるような会員の努力が必要だと思う。

藤根 今年の4部は約80人。これだけ

しか応募のない北海道書道展は問題があるからね。もっともっと努力して底辺を広めてほしいですね。

小川 もう少し良識もね……。

島田 良識と、やはり意識だ。

中川 5部制でこれからやっていく場合、どんな問題解決があるでしょうか。

島田 遠からぬうちに当番審査制がくるでしょう。全体を半分にサッと切って、アイウエオ順かなんかでやるより仕様がないよ。

中川 特に1部とか3部はある程度、何年か後にはそういうぎりぎりの線でなにかを考えいかなければ審査不可能だね。

島田 でも、その時までやはりなりゆきにまかせるのがいいと思う。なりゆき主義ってのはおかしいけど。

藤根 それが自然じゃないかな。

中川 さっき審査の日数の問題も出たんですが、部門によって1日で済んだり、ある部は2日間びっしりやって、相当神経的に疲れて大変だという声もある。これを3日間にした場合、その辺の問題はどんなふうになるのでしょうか。

島田 (審査員の負担の違いは) 仕方がないよね。僕は大賞選衡を先にやっちゃうことも一計だと思う。大賞選衡がメインだから千秋楽にもってくるという感じにとらわれるのもおかしいと思うんだ。

千葉 それは当番審査の場合でも？

島田 いや、今の段階について言っている。

千葉 今、問題なのはね、2日制でやった場合、審査の見方が浅いものかどうかということなんです。審査の内容の面

で問題があれば3日ということになるのではないか。審査と同時に見方の問題があるんです。

中川 去年から出品点数は2点以内の制約が実施されている。この点数制限についてはどうですか。

島田 そりゃもう仕様がないです。ただ公募1人1点はかわいそうだ。

藤根 1点にした場合、事務的な処理は実に早くなる。



大川 審査の日数ですけど、漢字は3日間にわたってもいいんじゃないかと思います。ただ、仮名

の場合は点数が少ないので2日間でいい。

島田 だからそのためには、大賞選出を先にやっちゃうのよ。

千葉 漢字を2つに分けるという方法はありませんかね。

島田 それはダメだよ。審査員の責任がないよ。

藤根 単純に2つに分けるということは全然考えられない。

千葉 実際、無理ですけどね。やはり。

大川 仮名の場合ですが、基礎でやる臨書に比べて創作の方に手が挙がるんです。臨書は日の目を見ないという感じがします。臨書の比重をもっと高めるような方法があればもっと底辺が広がることにならないかなと思うんですが……。

島田 それは仮名の審査の運用の方法

ができるんじゃないの？

大川 それは仮名の中だけで決めてしまってもいいのですか。

藤根 それは道展の審査員の見識で…。



スが必要になる。

藤根 漢字の場合は人によって臨書に対する考え方はまちまちだけど、ただ、実際の審査では臨書であろうが、なんであろうがいいものがとられている。

島田 それはいえます。

中川 今年25周年という節目の審査を終えたわけですが、これから道展をどんな姿にしていくか。その夢を——。

千葉 道南は道展の移動展があることによって随分作家意欲が高まってきた。これはすごく顕著な事実ですね。とにかく民主的な運営がありさえすれば、作品の質も量も高まってくるといえる。しかし、最近は全体をリードする作家層の中間部分がなんとなく薄くなっていると思う。道展の目玉作品がなく、作品の系統が漠然としたものになっている。なにが将来の道展の作品かというと、非常に難しくなってきてている。

中川 道展だけでなく、公募展そのものの性格として年数を重ねていくとホコリもたまるし、いろいろな問題が出てくる

ると思う。芸術運動と公募展の割り切り方についての問題もからんでくるのでその点について。

平田 これからは役員の数もふくらんでくる。それに対応するために、どうすればいいかということが、30回展を機会にして具体化してくるだろう。それから、類型が必要悪か、いかに克服すべきかという意識の問題もね。

藤根 類型化は毎年毎年問題になっているけど依然として問題のまま続いている。類型化を解消するには作家が独りになることが必要だけど、どうしたら独りになれるか、書の場合は仲々面倒な問題が多い。

千葉 僕が考えてきたのは、とにかく従来までの類型的なパターンのない作品に対して記念賞を与える制度。これを考えてほしい。これは強調しておきたい。

島田 それがあれば確かにいいんだ。ただ考え方としてある1人がこれは類型だといったものが、他の人には類型でないことがあることもある。

千葉 多数決でいい。

中川 記念賞の選び方にもかかわってくる。

千葉 類型という言葉は悪いですね。

藤根 しかし兄弟のように、おれは1人だと思っても他からみればどうしても似てくる。

島田 どうしても類型化ってやつは防ぎようがないところがある。

中川 師弟関係がある以上、これはなくすってことはなかなかできない問題ではないかな。

千葉 類型の程度の問題だと思う。

藤根 許容範囲なんだよ。ところが、自分がなくなってしまうことは困るってこと。思想の貧困さにつながる。

島田 でも、審査員自身も類型作品に対する目は非常に厳しくなっていますよ。

平田 材質が全部同じになってきたという感じもある。



島田 公募展に出す人だからみんな欲がないわけじゃないでしょ。去年の特選であんなので入っ

たから今年もおれはあれでやってみようというのは出てくるものなんだ。材質が同じになるのはよくあるんだね。

中川 最大公約数で、こういうのを出すと割合手を擧げる審査員が多いのではないかと計算する人もかなりいるのではないか。

島田 でも、その計算はだいたいはずれるけどな。

平田 低次元の類型というはどうしようもない。

中川 小川先生、この辺で夢を語っていただきたいのですが——。

小川 展覧会には僕自身が作品を通してかわりたいんだよ。1点出品してね。序列をつくるためじゃなくて、なにか作家的な一つの自覚にたって夢を噴きあげていきたいんだな。口はばったいけど…。

中川 平田先生、夢をひとつ。

平田 出品する人はやはり1個の作家

だという意識で作品を出してほしい。そうすれば必ず心を打つものがある。

中川 千葉先生、ひとつ——。

千葉 さっきも言ったけど、そっくり賞でない賞をつけてもらうこと。記念賞ね。

中川 大川先生は——。

大川 小川先生がおしゃったみたいに自分を高めてねえ…。公募の人も執念を燃やしてほしい。

藤根 みんな最後は個に徹する意識が最終的なものと思う。

島田 それはもう根本的な問題だよ。

小川 それからなにが開かれていくか、なにが閉ざされていくかを考えていくことは重大なことだと思う。

中川 出品点数の制限、出品人数の問題も一方においては無視できない。まだ道内には埋もれている作家も沢山いると思うし、そういう人たちを発掘しようと努力されている指導者もおられる。それと併せて……。

島田 制限を受けるってことは、展覧会では仕方がないじゃない。アンデパンダンとはまた違うんだよ。

藤根 公募展は受け皿が決まってしまうから、宿命的だね。

島田 僕もね、一番きらいなのは審査、その次は批評なんだ。これを道展でやらなければならないから、道展はきらいさ。でも、きらいだけどやってるんだからね、きらいなものも時には要求していかなければならないと思う。いやな面があってもよくしていかなければね……。

小川 どうですか、当番制で何十人なら何十人の審査員にまかせる、もう信頼

するというような、なにか、すかっとしたものが……。

島田 そりゃもう、当番制だったらあるべきですよ。

中川 でも、ただ審査をまかすからやってくれとはいかないな。

千葉 僕はね、北海道の作家らしさは辺ぴなところで1人もんもんと書いて、落選、落選、また落選、それでもなつかつやっていく。これにものすごくロマンを感じる。僕らもそういう環境にいたと思うし、苦悩のなかでくじけない姿に夢があるね。

島田 それは反対のことも言えると思うんだ。1人でもっていい気になっている場合もある。

藤根 千葉さんね、1人でやるといつても、1人よがりに終わるおそれがある。やるからには目を外に開く。ここなんだよ。難しいのは。

千葉 もちろん勉強しますよ。作家として出品する以上は当然いろいろ情報を得ながらやるでしょう。ただ、僕が言っているのは、師匠がいない、特別な団体に属していない、それから奥地の方で簡単に札幌に出てこれないとか、そういう環境のなかで1人やるということなんですよ。そこに書に打ち込む人間の美しさがあると思うな。

島田 ロマンチストなんだ。

中川 まあ、いろいろロマンチストらしいお話が出たところで終わるのも苦しいんですが、またの機会にということでの辺で、ほんとうにご苦労さまでした。

第30回 北海道書道展・記念展

〈特集〉

座談会 テーマ 北海道の書への期待について

北海道の芸術文化活動は、近年次第に高まりをもってきて、その層のひろがりは勿論、質的な面においても深まりをもってきてている。広く北海道の書も、これらの芸術文化の一分野として道民の間に広まり、親しまれてきた。

今回展はとりわけ回期を重ね、第30回北海道書道展・記念展をもつにいたった。この機会に、北海道の書活動や書道展について考え、あわせて、北海道の芸術文化の今後のあり方などについても考えてみたい。

本テーマを掲げて、有識者にご参集をいただき、有意義なご発言を頂戴した。

とき／平成元年4月16日（日）5時～
ところ／札幌グランドホテル17F旭の間

出席者／（発言順）

北海道書道展会員・本展運営委員長 中野北溟

北海道新聞社事業局次長 木村和男

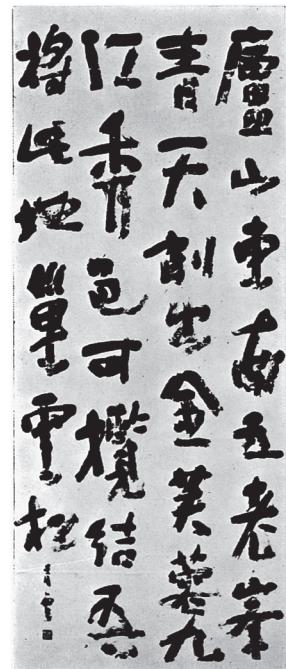
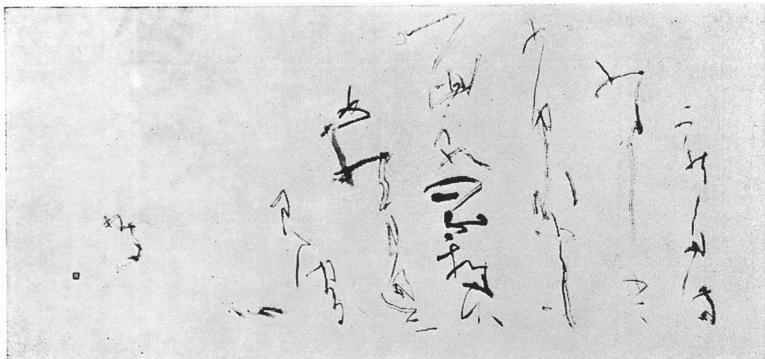
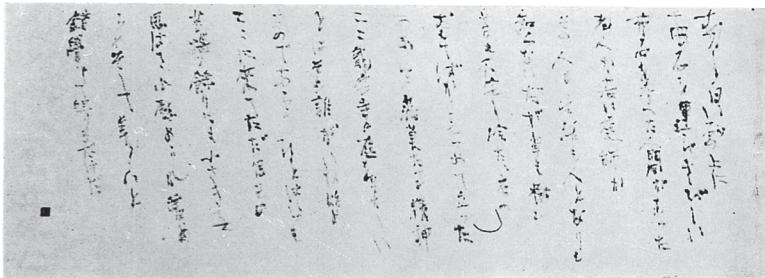
元三岸好太郎美術館長 工藤欣弥

美術評論家 佐藤庫之介

北海道教育委員長 細谷猛

司会

北海道書道展会員・本展運営委員、総務部長 中野層翠



① | ②
③

- ① 第8回展大賞 丸山 薫風
② 第9回展大賞 永田 青雲
③ 第10回展大賞 岩井 鶴泉



■ 北海道の書——その芽ばえから

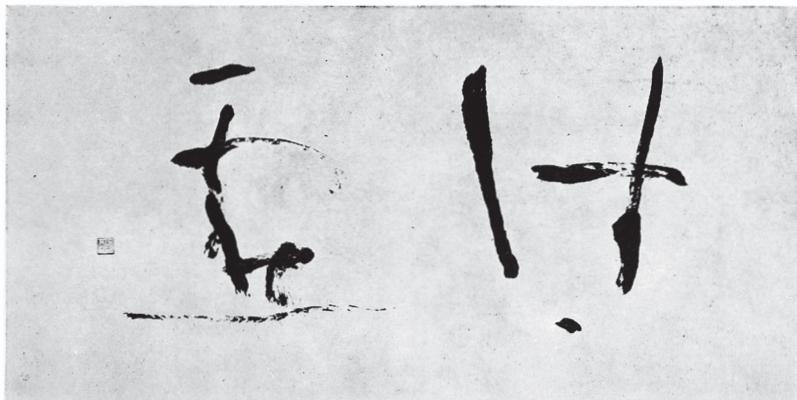
司会 本日はお忙しいところご足労いただきまして恐縮です。北海道書道展が大きな節目の30回展を迎えるにあたり、記念の座談会を開くわけですが、まず、本展運営委員長の北溟先生から基調報告を兼ねて、北海道の書の芽ばえなどから。

中野 30回展というのは、大きな意味をもっていると思います。北海道の書道の芽ばえはいつかということが書道をやる者には興味があるのですが、聞くところによりますと、すでに大正末期あたりからでしょう。大塚鶴洞先生がおられ、そして昭和の初期にかけていわゆる現代書道の父といわれる比田井天来先生や、川谷尚亭先生方が来道され、古典を中心とした書の新しい境地を開かれた。かなでは尾上柴舟先生が来道されて、北海道に芸術的な書壇の動きを形成したと思います。この中で先輩の金子鷗亭・桑原翠邦といった先生方が影響を受けながら搖籃期を作り上げ、その芽が戦後に大きくなりってきたのではないかなどと思います。そして、芸術運動の一つとして屈折を経ながらも書の展覧会が開かれ、昭和30年に北海道書道連盟が結成されました。これが根っこになって

35年の第1回書道展に実を結び、30年の歴史を積み重ねてきたわけです。冒頭に申し上げたように、この意味をどうとらえ、どう展開していくかというのが、私たち書道人に課せられた大事な仕事だろうと思います。このことは同時に、地方の時代といわれる中で、書にとっての風土性と独自性、展覧会のあり方、生涯教育とのかかわりを考えることにもなり、新しい書の時代の胎動につながっていくのではないでしょうか。

司会 それでは順次、ご意見などをいただきますが、その前に、本日ご出席を予定していた第1回展当時の北海道新聞学芸部長、山川力さんから、よんどころない所用のため残念ながら、と連絡がありました。

中野 そのことで伝言があります。山川さんから、これだけはぜひ皆さん的心に入れておいてほしいと——。それは北海道というジャンルの中だけでなく、もっと外に目を向けて、例えば北海道出身の個性ある作家や中国、韓国などの作品から視野を広げたりあるいは、個性ある作家を育てるための内



④ | ⑤
⑥

- ④第11回展大賞 藤根 凱風
⑤第14回展大賞 田中 翠鶴
⑥第15回展大賞 小黒 秋峯

部討議などの機会を大いにもつべきだということでした。

司会 1回展をスタートさせたころの連盟はどうだったんですか。

中野 先程も申し上げたのですが、連盟ができたのは、一つには仲よくしようという事情がありました。それまではどうもうまくまとまっていなかったのです。34年ころまでは全道展と銘打って二つの団体の展覧会があり、これがどうしても一方に片寄ってしまう。そこで、戦後十数年過ぎたのだからそろそろ一本化を、との動きが出たが、やはり第三者が中に入らないとまとまらない。そこで当時、美術館の建設運動をしていた道新の山川さんが芸術界に通曉していた関係で、まだ30歳ちょっとで若かった私や道新の竹岡和田男さん、神埜努さんらと、なんとかならないものかと話し合う中で、山川さんにお願いしてと、当時の石田栖湖、金丸梧舟、加納守拙、佐藤大朴、松本春子、宇野静山、渡辺緑邦という錚錚たる先生方の中で十分に連絡調整しながら一本化の方向が出てきました。当時は出品が350点ほどで、入選はその半分くらい。会場は丸井で、入賞者と審査員、会員のみの展示でした。審査員は30人くらいだったでしょうか。これが30回展の今は2,000点余り、審査員は140~150人、会員は250~260人になりました。

司会 第1回展のプログラムを木村さんがお持ちですが、主催はどうなんですか。

木村 これは貴重な資料で、現在と比べると非常に簡素なプログラムですが、主催は北海道書道連盟と北海道新聞社です。

佐藤 2回まで共催で、3回目から道新主催になった。

司会 連盟スタート時は親睦が狙いで、事業はやらないという規約になっており、芸術上の主張からの連盟設立ではなかったと、ある意味ではいえると思うんですが、このあた

り他の美術団体と比べると、どうなんでしょうか。

工藤 やはり、美術の方でも、厳しく競い合うというよりは仲よくやろうというムードがあるようです。道展なんかは、道展一家といわれるよう、家族的な雰囲気があります。女流の高木黄史さんをオバチャン、オバチャンと呼んだり、亡くなった本田明二先生なんかは親父みたいな感じで囲んで、非常にあたたかみのある印象でしたね。



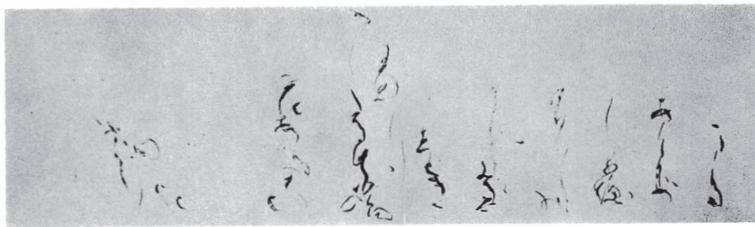
司会 まあ、当時は親睦を標榜しながらも、純粋に芸術活動を推進しているところがあったと思うんですが、佐藤さん、いかがですか。

佐藤 その通りですが、やはり、生みの悩みのようなものがあったと思います。友誼団体として冠婚葬祭につきあっていればいいという段階があったわけだけど、それを突き崩して展覧会をやろうではないかという機運になったのも事実です。これは、戦後15年たっての時代の感受性みたいなものと、どこかで重なっていたといえるでしょう。もう一つ、悩みがあったとすれば、審査員の構成でしょうね。その前提に書道教育連盟の人たちの教育者として仕事をしてきた積み上げを、即、作家活動にしてしまうのか、しないのか、その選択、判断の難しさが1回展のころにあったように思います。

司会 連盟に加わらなかった人たちもいました。

工藤 結社を作る場合は、たいてい、何らかの主張があって人が集まりますが、全道という地域を規模にした団体の場合は、主張を貫くというより、地域全体の書道文化や美術文化を盛んにするための一つの方法として考えるのではないでしょうか。従って、一般公募をして、初心者を含め全体のレベルを上げるという使命を担って出発していると思います。

司会 地域性と時代背景の中で北海道書道展が誕生した



⑦ | ⑧ | ⑨

⑦第16回展大賞 奥村寿美子
⑧第17回展大賞 千葉 軒岳
⑨第18回展大賞 長谷川北邦



わけですが、このスタートが10年後、または10年前だったら、また違った展開になったのでしょうかね。ところで木村さん、出品点数などはどうなっていますか。

木 村 セっかくですから先程、話に出た第1回から申し上げますと、352点の出品で246点の入選でした。今年の30回展は応募が2,031点、入賞入選が1,280点、入選率は63.7%になります。1回展は69%でした。昨年までは59%台で、ちょっとシビアでした。



司 会 ひところは40%台のこともありましたね。他の公募展は、どうなんでしょうね。

工 藤 絵の道展、全道展なんかは、もっと低いと思いますよ。

中 野 絵の方は1人で何点も出品してますからね。書道は1人1点と制限していますから……。

佐 藤 道展は10%を切ったといわれてますが、1人で4、5点も出しますからね。人数で割るとどうなるか……。

司 会 器の確保では、書道展は三つの会場でやってきましたね。丸井と……。

木 村 最初は丸井さん。それから道立近代美術館ができて、あそこの特別展示室でやりました。それから市民ギャラリーができると同時に移りました。丸井さんはずうっと使わ

せてもらって、現在は市民ギャラリーと丸井さんです。30回は記念展ということで、道新ビル7階を使って三会場になります。

司 会 30回の紹余曲折の中から何か一つ挙げるとすれば、どんなことでしょうか。

中 野 書道ブームと一時いわれて、それはまだ続いているようにも思うんですが、ブームには量の問題、量が多くなるとブームになるという意味があって、これが質的にもブームになってほしいんだが、なかなかそうはいかない面がありますね。しかし、まあ、30回という区切りでみると、質的には段々と上がっており、地域文化の向上という点ではあります。

司 会 書道を含めて文化活動が30年代から40年代にかけて盛んになってきましたが、細谷先生、日ごろ、お思いになつてることを……。

細 谷 私は絵にも書にもさっぱりで一般的な話しかできませんが、文化活動の裾野が広がると、どうしても質の問題が出てきますね。これは、教育でも同じです。進学率が90%を越えて、ほとんどの子供が高校へ入ってきます。教育の普遍化では大きな意味をもっていますが、その子供たちを伸ばしてやるについては、難しい問題が出てきます。教育の量と質は先進国共通の課題なんです。

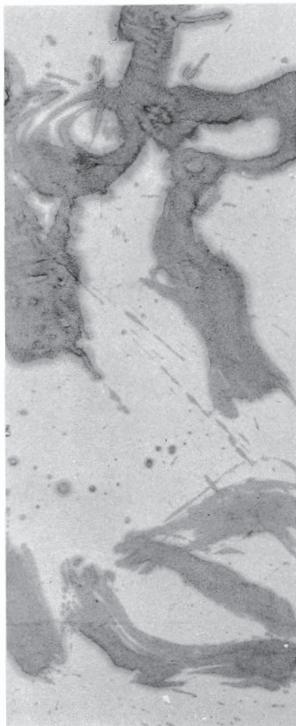
■ 書の風土性の問題——北海道の書の独自性は

司 会 どうやら30回展以後の目標がクローズアップされたようです。ところで、よく東京などの美術展の審査で、北海道の作品は運び込まれるとすぐ分かるといわれますが、そうなんでしょうかね。

工 藤 それは、風土性のことだと思います。上野の都美

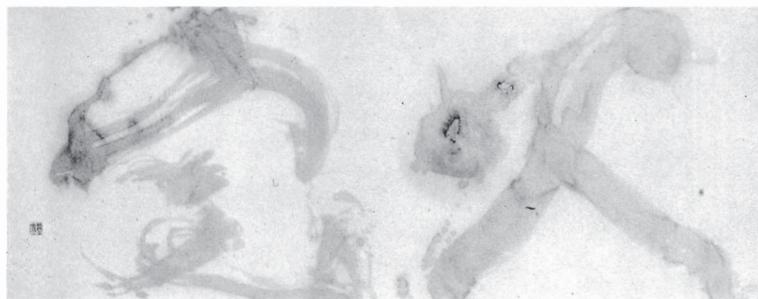
術館で絵の展覧会を見てますと、やはり、北海道と、雪の降る地域の作品には、作家が意識するしないにかかわらず、その風土性がにじみ出るようです。

細 谷 63年の北海道新聞文化賞の贈呈式で感じしたことなんですが、受賞された作家の八木義徳さん、北大の河川工学



⑩⑪
⑫

⑩第19回展大賞 本間 孤峯
⑪第20回展大賞 羽毛 蒼洲
⑫第21回展大賞 遠藤 香峰



の岸力さん、旭川の木工団地の北島吉光さんの3人が3人とも、スピーチの中で北海道の風土性にふれているんですね。八木先生は「私の作品は血と土と海の波から生まれた」とおっしゃっていました。岸先生も風土に根ざした技術、北島さんも独自の風土の中で何を考えるべきかをさぐっていると話されておりました。北海道で生まれ育つと、どうしてもその生活や考え方で北海道の風土性が出るのでしょうか。

中野 風土性のとらえ方ですが、言葉としては分かっても、じゃあ「北海道の風土性って何ですか」と聞かれたら、どう答えたらいいのだろう。フロンティア精神とか荒々しいタッチ、土性っ骨とかあるけれど、これらで十分なのだろうか。



工藤 おっしゃる通りですね。言葉で定義づけるものではなく、作品を見たらすぐ分かるというものでもなく、ちょっと心に引っかかったのが、見てみると北海道の人だったというようなことで、一括して北海道の作家にはこういう風土性があると決めつけるわけにはいかないでしょう。

佐藤 風土性という機軸からはずれるかもしれないけれど、他府県に比べて北海道の書は規範性が強い。これはどうしてかというと、書道史をひもとくまでもなく、北海道の書は若すぎるほど若い。戦後は40年ですが、戦前を40年逆のぼると日露戦争まで行っちゃう。もう40年逆のぼると明治の戊辰戦争です。それからたかだか120年しかたっていない。北海道といいい方をすれば、松前から内陸に点が線になり面になった足跡は、たかだか80年くらいのものです。そこへ出て来るのが大正8年くらいの比田井天来で、その翌年あたりに大同書会札幌支部で、これは支部長石井雙石、事務局大塚鶴

洞といった人たちが軸になって仕事をした。ただ、北海道にはこれらの人々の仕事を受け入れる土壤があったのかなあと、私にはちょっと引っかかるわけです。北海道の書には、胡散臭さがない。反語的な意味も含めて“正統的”な書が多い。明清調とか明清書とかいう無責任な言葉がありますが、これは北海道では受け入れられなかった。これがいいことなのか、そうでないのか、というところに、北海道の書の今後がかかっていると私は思います。個有性、個別性、ワタクシ性みたいなものを拒みながら、一方で個性、個性といっているあたりを、私は両中野さんにお聞きしたいですね（笑い）。

司会 京都では、誰に習っているとはいわず、この先生のお宅で習っていると聞いたことがあります。この感覚は北海道にはありません。佐藤さんの話はこのことと関係があるのかなあとちょっと考えました。油絵の世界では、なにか、似たような特質がありますか。

工藤 北海道に油絵が入ったのは大正時代でしょう。北大の黒百合会で学生らが描いていたのは水彩で、有島武郎先生が油絵を描いたらみんなびっくりした。そんな時代で、素直に受け入れた。司会がいう「あの家」という考え方方は日本独特のものですね。油絵は西洋の文化です。書や日本画にある破門というのは、西洋にはありません。ここが違うと思いますね。



佐藤 北海道の書でもう一ついえば、逃げ出したくなるほどの伝統の重圧といったものはありませんね。北海道書道展の30年は、同時代に生きている者にはつい昨日から始まったような錯覚に落ち入りますが、この30年には、たいへんな重みがあると思います。そして、30年を逆に逆上るとどうなるかといえば、金子鷗亭先生が川谷尚亭先生の作



⑬⑭⑮

- ⑬第22回展大賞 辻井 京雲
⑭第23回展大賞 柏木 淳風
⑮第24回展大賞 越坂 柳徳



品を双鉤填墨しているんですね。大正14年です。伊藤東海さんが小樽、札幌、旭川で現代名家書道展という移動展をやっている。その時に金子さんが一番魅かれたのが川谷尚亭で、金子さんの若い感受性が、尚亭の根っ子のところを見すえていたのだと思う。伝統も何もない。ある意味では、きわめて自由だった。

司会 強力な指導者のいる県展では、その書風に染まってしまう傾向があり、それに比べると北海道の書道はバリュエーションに富んでますね。

細谷 いま伝統の話が出ましたが、司馬遼太郎さんに「故郷忘じがたく候」という短編小説があります。主人公は陶芸薩摩焼の沈寿官という人で、この人たちは鹿児島半島の苗代川のほとりに住んでいるのですが、もともとは約400年前の朝鮮の役で薩摩の島津義弘が連れ帰った陶磁の工人一族でした。そのリーダーが沈寿官家で当主は14代目です。私はこの小説を読んで一度訪ねたいと思い、昨年、行って来ました。そして沈寿官さんに会い、伝統と創造といったことについて話を聞きました。薩摩焼は14代にわたる伝統の積み重ねがあるわけですが、その中で、ぢゃあ、自分はいったい何なんだと伝統の鎖の輪の一つに過ぎないのかと、沈寿官さんは13代目の父親と口論したらしいんです。結局、沈さんは、明治、大正の先代たちとは違う昭和の14代目としての個性を伝統の中に表現しているのですが、この話を聞いて私は大変感動しました。

司会 伝統と手法の話としてお聞きしましたが、これは書道の創造性とも関連があると思います。北溟先生、いかがですか。

中野 難しいですね。ただ、伝統と伝承は違うと思います。伝統は技術ではなく精神的なものではないか。5年前に私は中国の雲峰山に登りました。途中、17、8カ所に摩崖に

刻した書があり、これに心魅かれて登りました。狭い頂上には「雲峰之山」という字があった。幅30センチ、長さ1メートルぐらいです。それが斜めに天を仰いでいるのです。青々と晴れ上がった空の下広々と開けた大地、遙かに渤海湾を望むのです。山膚は険しいという状況で見ると、何ともいえない峻厳な気や、違う世界に自分が置かれている神々しさといったようなもの、伝統の香りみたいなを感じました。歴史を感じる中で大きく時間が構成され何か自分が目覚める。これが伝統に通じるものなのではないかと、今でもその感動が忘れられません。

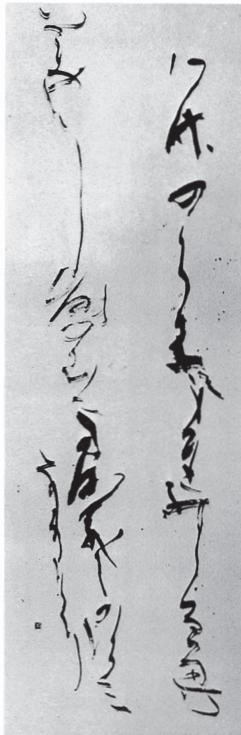
司会 伝統と創造性についてかなり高度な話になりました。書の場合には、実際的具体的には誰々先生の字を見て書くことが多いですね。

佐藤 (笑いながら) それでいいんですか。

司会 いいんじゃないですか。例えば活字を見て書いてても、その背景になっているものは誰々先生であったり、歴史の中に出て来るものであったりということだろうと思います。

工藤 書の創造性の前に、芸術の創造性って何だろうと、いま考えていました。例えば道立近代美術館に「室内風景」という神田日勝の絵があります。壁に新聞紙を張り巡らした中に男が膝を抱えて座っている絵ですが現代社会に疎外されている人間性とか、人間の孤独感を非常に強く感じます。芸術の表現は作家が心にもっているものを文学や絵、書という手段を借りて表現することでしょう。音楽や舞踊も同じです。あらゆる芸術の分野で作家が表現しようとしている創造性とは、逆にいったい何なんなのだ、と、今日は教えてもらいたい気持ちで來たのです。

司会 書く作業というのは単純で、自分の中に無いものは出て来ません。他人の字をなぞっても、他人ではなく自分



⑯第25回展大賞 本間 紫雲

⑰第26回展大賞 新井山蘭牛

⑱第27回展大賞 小林 慶風

になっちゃいます。そのへんの創造性の中身は、今のお話に通じるのですかね。

中野 絵画では同じ絵を描くと盗作になるけれど、書ではそれはない。

佐藤 それを問題にしましょうよ（笑い）。

工藤 書の展覧会で一番魅力を感じるのは、近代詩文書です。文学かぶれのせいか、そこに書かれている詩の心のようなものにまず打たれ、それがどういう風に表現されているかというところに興味をもちます。昔は無かった近代詩文書が書の世界に新しく現れてくるあたりに、作家の創造性への欲求があったのかと勘織るわけですけども、実はよく分からんないです。

司会 書の創造性には、意図したり意識したりする中から生まれるものと、その人の生き方が即造形になるものとの二つがあると思います。その辺を佐藤さんにキッパリと……

（笑い）。

佐藤 キッパリかどうかは……（笑い）。ただ、工藤先生の話に乗っかった形でとお断わりして申し上げますが、作品は自分の内側の何かを表すのはその通りですが、文字の形を通すという点で書は他の芸術より手続きが面倒という気がします。同時に、文字は日常性とかかわっており、それを作品にする場合は、つまり作家の内側にあるものを書にする場合は、それを100%出せるほど自由な型式ではない。これは書の文字性をどう考えるかにつながっていくような気がします。

工藤 焼きものなど工芸の世界では、精神的な自己主張の表現はほとんど不可能です。しかし、そこに作家の思想と

いうものが考じられる場合があります。書ってのは、そういうものかもしれませんね。だんだん分かってきました（笑い）。

佐藤 先程申し上げた日常性に関連して、かなの問題を考えると、このことが分かるような気がします。現在、書かれているかなの質とは全く別に、かなが発生した7世紀ころは、そんなに日常から飛躍したものではなかったろうと思います。ところが20世紀も終わりの現代はボールペンと電話で用を済ませて、水茎の跡うるわしいようなかなは誰も書かない。芸術というのは日常性を根っこにして、それをどう超えるかだと思いますが、書のかなが一般の人に理解されにくいのは、非日常から非日常へ行っており、逆にいうと近代詩文が分かりやすいということになろうかと……。

司会 近代詩文の話が出たところで、北溟先生は文字性、あるいは文学性をご自分ではどんな風に押さえていらっしゃいますか。

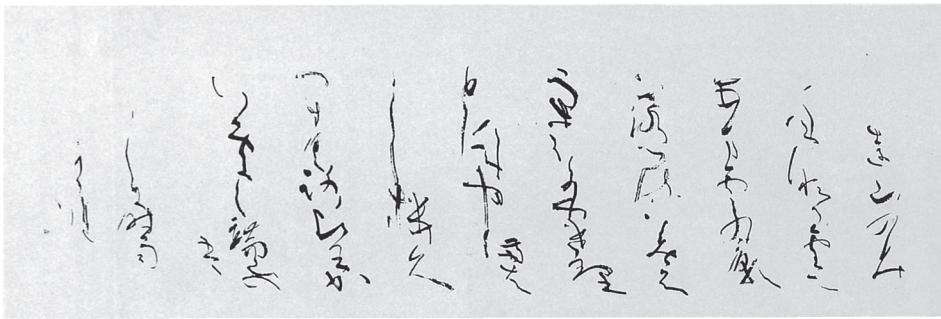
中野 とらえ方としては二つあると思います。一つは工藤さんがおっしゃっていた詩のもつ内容、言葉がもつ語感、あるいは文字を形づくる運動感覚といったものが書くということに大いに関わってくると思う。もう一つは、そういうことをやっているうちに、全くそれとはかかわりなく、ただひたすら書いていく気持ちになる場合がある。坐禅などにも二つあるそうですよ。あるお坊さんの話では、考えながらの目的をもったそれと、何もないただ座ることに自己を思い出す坐禅があり、どちらも大事だというんです。これは書と書くということで何かしら教えられるような気がします。

■ 書の一般化にかかわって——鑑賞の場をひろげる工夫を

司会 今日のテーマでは時間がどれほどあっても足りないのですが、今までの話の中で言い尽くせなかつたこと、あ

るいはこれだけは言っておきたいことをひとこととずつ……。

木村 書道展の事務局長を8年間務めてきて、書とは作



⑯ ⑰

⑯ 第28回展大賞 飯守 あき
⑰ 第29回展大賞 佐々木信象

家と見る人の交流で成立することなど、いろいろな面で勉強させられました。事務局の問題としては、公募展としての底辺の拡大、それから質の向上で、この二つをうまくかみ合わせると同時に、発表と鑑賞の場を広げていくのが31回以降の課題だと思っています。

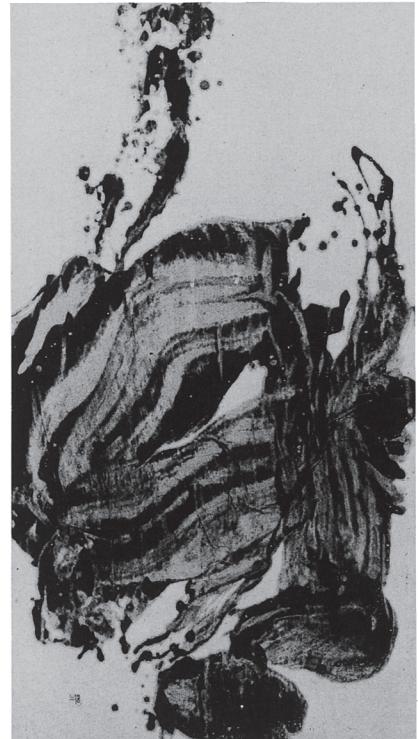


細 谷 高齢化社会を迎えて、生涯教育の必要性が高まっています。先に開かれた道の文化懇談会で知事と各界代表の話し合いでも出たのですが、30回の伝統のある書道展を含めて北海道の文化の広がり、高まりを伸ばしていくたい、行政側は施設、指導者、鑑賞の機会などを考えながら援助していくたいということでした。

工 藤 芸術には創造と鑑賞の二つの側面をもっています。書道展が北海道文化の振興に大きな役割を果たしたことには敬意を表しますが、その展覧会場で感じるのは、作る側の会場だということ。入場者も自分の知っている人の書ばかり見ている。一般の人には読めない文字が並んでいる。読めないのは次元が低いんだといわんばかりで、鑑賞者への配慮、サービス精神がない。日展では作品に読み方がついており、解説員がいる。北海道でもそういう書を大衆に近づける工夫があつてもいいのではないでしょうか。

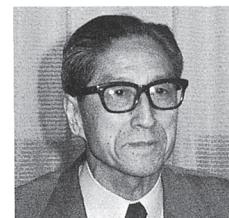
佐 藤 いまの話に全く同感です。書道展会場の市民ギャラリーには出品者とその家族、作家予備軍ばかりで、良質な鑑賞者がいない現状がある。自宅の床の間に書を飾っている人はたくさんいても、その人たちは会場に足を運んでいない。これは、書く側にも課題があるのではないかと思う。おしな

※本欄には8回からの作品集により大賞作品を集録した。
7回までは発刊されていず
集録できない。



べて、現代書は気難しさを深めている側面がある。私自身は書かないし書けないし、それでいて書の外側でなく勝手に内側にいるのだが、こんなことでは会期を待ち望む層が生まれるだろうか。字を書いているから文字性が豊かとはいえない。文字の約束事を蹴とばしている人たちもいるが、作家に欠けているとすれば文字性と向き合う気迫だ。造型性が文字性を犠牲にしているのは残念です。ついでにいえば、書道における略字は勘弁してほしいですね。

司 会 この座談会では一定の方向づけや結論を出すことより、広い意見をいただくのが狙いでいたが、その意味で有意義な話し合いでした。書道展の今後のあり方を含めて大きな反響があると思います。



中 野 この席に山川さんがお出でいただくようになっていたがこれなくなつた。山川さんは、本展の第1回を開催するにあたって尽力された、当時道新の学芸部長だった。その伝言を、「最近書展をみて見て思うのだが、少しずつ独自性ある作家が増えはじめた。書は言うまでもなく芸術のジャンルを確保しているのでうれしいことではあるが、これがもっと書道界にひろがってほしい。まだお手本に忠実に、の考えがのこる。作家が何を考え何を思っているか、やはり普段如何に書に対しているかが問題なのだが、そういう作家の生き方みたいなものを展開してほしいものだ。道展30回展を節目として生々発展する可能性をもつ書の世界に大いに期待をつないでいる自分なのでひとこと申しあげたい」ということでした。

●第40回北海道書道展・記念展 特集●

座談会

●テーマ●

北海道書道展の明日を語る

細胞を知ることなしに明日の健康を語れないとすれば、北海道書道展の明日をつくるであろう“新しい細胞たち”は、いま何を考え、求めているのだろうか。これまで、時代の節目に行われてきた記念座談会だが、このたびの40回展においては、新進気鋭の6人の会員から北海道書道展の明日への夢をテーマにさまざまな視点で語ってもらった。



【日時】平成11年3月26日（金）18：00～

【会場】札幌グランドホテル

●出席者（五十音順）

青木 空豁（北海道書道展会員・2部漢字〈少字数〉）
清兼 吼（北海道書道展会員・1部漢字〈多字数〉）
越坂 久雄（北海道書道展会員・6部篆刻・刻字）
佐々木信象（北海道書道展会員・5部墨象）
千葉 和子（北海道書道展会員・3部かな）
矢野 鴻洞（北海道書道展会員・4部近代詩文）

●司会

辻井 京雲（北海道書道展会員・運営委員会総務部長）

●オブザーバー

中野 層翠（北海道書道展会員・運営委員長）

私のなかの北海道書道展

司会 これまで節目の年に行われてきた記念座談会ですが、今回は若くして会員になられた方々、いわば今後の北海道書道展の核になるであろう気鋭の先生方にお集まりいただきました。それではまず、運営委員長の中野層翠先生から挨拶をお願いします。

中野 この記念座談会を振り返ると、20回展では創設会員の先生方にお集まりいただき、草創期の生みの苦しみについてお話しいただきました。また、30回展では、北海道書道展を“外の眼”で眺めてみようという主旨で、道内における美術および教育関係の有識者の方々から、北海道の書の文化的位置づけについて語っていただきました。今回はさらに視点を変え、今後の北海道書道展を担う皆さんに、将来へ向けての意見を述べていただけることを期待しています。

司会 ありがとうございました。今日話し合った内容が20年後、30年後にも影響を与えるような発展的な座談会となるよう進めていきたいと思います。まず、それぞれの先生には、ご自身の学書の歴史と道展への思い入れについてお話しitただきたいのですが。

清兼 僕自身の道展との関わりは学生時代からになります。大学に入り書道の研究を始めたころ、道展の作品集を見る機会があり、書のことがわからないなりにも「これが道展なのか、僕にもこういう表現ができるのだろうか」と感じました。その後、大学1年のときに創作をしてみようと思い立って、あちこちの作品集から好きな字を集めてきて、最初の作品をつくったのを憶えています。

公募展の体質に関するいろんな話はその時代からも聞いていましたが、僕にとってはまず勉強のために出してみようというのがスタートでした。ただ、周囲には公募展に出すことに反対する人たちがいたのも事実で、そんな理由から出品しなかった年もあります。すると先輩から「その間お前は何をしていたんだ」と言われ、「そうだ、やはり勉強しなきゃだめなんだ」と気づいたり。いま振り返ると、道展は僕にとって勉強の場であったことは確かです。年に一度、何を書こうかと考える背景には、公募というよりも勉強の意識があったと思います。

青木 いま清兼先生の話を聞いて、似たようなスタートだったのだなと思いました。僕も大学時代に道展と初めて関わるまでは、いろいろな先生に手ほどきを受けましたが、どの先生からも「道展に出品したら」という言葉を聞いたことがありません。最初はなんとなく好奇心で出したという感じです。当時、普通の学書は臨書で複数出品が可能でしたから、臨書で傾向の違うものを2点出すことにしました。そのときは金文だったんですが、いま見るとひどい作品で、変わって見えたんでしょうね(笑)。それが秀作をとってしまい「道展って、わりと簡単じゃないか」と思いあがった記憶があります。その後出品しても、何年も入選できま



中野運営委員長

せんでした。

当時は公募展が本質的でないとかいろんな意見を持つ先輩が近くにいたので、一時は疑問にも思いました。ただ、外側から単にいい悪いを言っているだけでは何もわからない。じゃあ実際はどうな

かという気持ちで道展に関わってきました。何もわからず出品し、結果だけをいただいていた公募の時代を経て会友になり、他の皆さんと一緒に手伝いするうちに、今まで知らなかった道展の内側を垣間見たり、運良く会員になれたあとはまた違う視点で見られるようになりました。

千葉 私は17回展からスタートさせていただき、当時はすでに社会人で高校教諭をしておりました。自分にとってはすごく遠い道のりでしたが、書くことが勉強だと思って出品していました。初出品で初入選して、とても嬉しくて、家族揃って見に行った記憶があります。会場に作品がびっしり飾ってあるなかで、自分の作品を見つけたときは本当に嬉しかった。その後10年かかって会友になってからは、会員の先生方と直接お話しする機会もでき、立場の違いというのを強く感じました。さらに10年経ち36回展で会員になりました、今度はまた違う立場で関わっているんですが、道展に対する思いは変わっていません。ただ、視点が変わることによって、ところどころにある問題に気づくようになったのも確かです。

矢野 私も大学から書道を勉強し、道展に出品を続けています。私にとっての道展は、書道に賭ける夢とでもいうのか、青春時代に思い描いていた表現の場が道展なんです。いま書道に関わっていられるのも、こういう場があったからこそという思いが強いですね。東京の中央展にも出品していますが、特に北海道書道展は印象が強い。一つは、公募あるいは会友時代を通して泣き笑いがあったことですね。よかったことも悔しかったことも、いま振り返ると実に楽しい。作品を通して工夫や実験をしてみたり、チャレンジ精神を發揮できる展覧会が北海道書道展なんです。また、学生時代から展覧会を見に行くのが好きでしたから、いろいろな作品を見ては「やられたな、すごいな」という感動がありました。私は近代詩文書を中心に勉強していますが、当初は漢字や墨象にも何度も出品したことがあります。自分との関わり以外にも、他の作品を見て強烈な刺激を受けられたというのが道展ですね。

佐々木 私も旭川での大学時代が最初です。道展の作品集を見せてもらうと、過去の先輩たちが特選などをとっていたので驚き、自信はないながらも墨象の部に出品してみたわけです。昭和42年の初入選のときに書いたのは「知」の

字。社会人になってからは出せなくなったんですが、道展への憧れというのは変わらずありましたね。冬がくると「さあ、書こうか」と気持ちが盛り上がってくる。

墨象の場合は墨づくりから始まるんですが、シバレがくると、ニカワを使って金だらいで墨をつくるんですね。特に旭川の冬は寒くて大変ですが、それが醍醐味というか、とりこになっていく自分が実感できました。暖かいときにはボンド素材で書くこともありますが、作品制作にはニカワの関係があるので寒いときを狙って書く。当時は複数出品だったので、ニカワとボンド両方の作品を出してみたり。道展への憧れが自分を駆り立ててくれたといえます。また、会友になった25回展はちょうど江別に転勤した年だったので特に印象深く、自分の足跡と道展での節目が揃っている。人生とともに道展があったと感じています。

越坂 私は高校生のときに出品したのが最初でした。いま篆刻では7.5センチという規格サイズの石を使っていますが、当時は12センチまでだったんです。最初の作品をつくるとき、かな半紙に12センチの大きな印泥で印を押したんですが、なかなかうまくいかない。何度も紙が破けてしまって、結局は徹夜作業で100枚近く押した記憶があります。

もともと僕は篆刻にあまり興味がなく、中学時代は木彫をやっていました。最初は石に彫れるのかどうかという不安がありました。石の上についている鉤（チュウ）を彫り始めたのがきっかけでした。それまでは立体的なものばかり彫っていたのが、字を彫るようになると難しく、18歳のときに出した道展では筆意を反対に彫り込むことが難しくて出来ず、落選しました。しかし篆刻のいい作品を会場で見ると、若いながらも嫉妬心が芽生えるんですね。初入選するまでは自分なりに苦労した憶えがあります。ただ、正月近くになると血が騒ぐというか、締切が近づいてもいい発想が浮かばないときには、作品に向かうための精神統一が必要になる。趣味を通じてのそうした経験は、精神面での肥やしになりました。また、会友時代も含め今までには、書を通じてたくさんの仲間ができ、多くの先生にご指導いただけたのが有意義だったと思います。

公募展はプラスか、マイナスか

司会 皆さん若い世代でありながら、やはり長い間書に関わってこられただけに、それ相応の思い入れが感じられます。ところで、先ほどの発言にもありました。北海道書道展をはじめ公募展というものに対して、巷には批判もあるようですね。公募展に出すことが本来の書の勉強ではないということなのでしょうか。そこで公募展とはいかなるものか、公募展の是非について論じたいと思います。迷いを感じた人もそうでなかつた人も、一度は公募展について考えさせられる。そんな往きつ戻りつの気持ちもまた正直なところではないかと思います。そのへんについてはいかがですか。

青木 僕自身は公募展について否定はしません。ただ、最



青木 空豁

初は勉強のつもりで出していても、何度も落選するうちに、やはり入賞したいと思い始める。じゃあどんなものが入賞しやすいのか、その傾向と対策について考える時期があったような気がするんですよ。わざと傾向の違うものを2点出してみる

とか、小さいものが流行すればそういうのを多く書いてみるとか。そんな馬鹿げたことを考えていたときに、たまたま特選をとったんですね。

そんなとき、尊敬する先生から「胸が悪い」という大変辛らつな一言をいただいた。よほど私の作品のなかに、見透かされるようないやしさがあったのではないかと思います。そのときの恥ずかしさと苦い思いは忘れられません。ちょうど公募を終えて会友になった年でしたが、折にふれてわが身を振り返るきっかけになったできごとだったので、いま考えればありがたい一言だったと思います。

清兼 もともと公募展には、広く公募して愛好の仲間を増やし、書道の発展を願うという狙いがあると思います。しかし、やはり公募展に出せば賞がほしいというのが正直な気持ちじゃないでしょうか。「賞を狙ったり、いい作品を書こうとするとろくなものが書けない」という人はいます。書を創造するうえではもちろんそうですが、公募展というのは賞があることが応募の動機につながる。僕も勉強のつもりで出して、最初はなかなか入選できず、悔しい思いをするうちに賞をとりたいという気持ちになっていましたが、その作品が「ろくな作品でない」となると矛盾を感じてしまいます。

いま僕自身は勉強の場だと思っていますが、そうでない考え方で公募展に出す人も多いし、それに出させない指導者も多い。そのことが、当時若かった僕にしてみれば矛盾を感じた部分でした。だから割り切って、自分のために出すんだという考えを持ったんです。最初のころは会場に行くと似た作品が数多くあり、「本当にこれでいいのか」と疑問も持ちました。一方、自分たちが本当にやりたいものを表現できる場を求めて独自のグループ展をしていた先輩たちもいて、それに共感した時期もあります。そういう意味で、公募展というのは問題も含んでいるかもしれません。

矢野 私も大学時代などは、周囲にいた書の仲間のうち半分くらいは道展をはじめ公募展に出品し、半分は何らかの主張があって出さないということがありました。そんななかで育った自分としては、公募展のなかで自分を鍛えていきたいという気持ちで積極的に出品してきました。正直に言えば、すばらしい作品に出会うと何とかものにしたい、

と。又、真似したいなど俗な見方をする自分が嫌だと思ったこともあったし、逆に落選してもいいから自己主張してみようと思うこともあります。そんな長い年月を経過しながら、だんだん自分なりのものができるいいのじゃないかと、のんびりした考えでやってきたわけです。ただ、私にとって公募展というのは決してマイナスではなかったと思っています。

また、私も佐々木先生と同じく旭川ですが、旭川では、公募展に出品したあとで互いにフォローし合える環境があった。ジャンルや主義主張が違っても、互いの作品に対してあるときは辛らつに、あるときは愛情を込めて作品について論じるということに意味があったと思います。公募展についてはいろいろ意見があるようですが、私にとってはプラスになっていると思います。



清兼 吼

向は間違っていないよ。そのまま進みなさい」という一つの道標をいたいたと思ってきました。いまは公募展によって育てられたという思いです。特に北海道書道展は本当に厳しい道のりで、年々ハードルが高くなっています。しかし私の実感としては、道展がなければここまで歩いてこられなかっただろうと感じています。

司会 やはり公募展というのは賞が問題なんでしょうか。入賞、入選した人はやる気になるし、落選した人は悔しい思いをする。賞と自己主張との間で悩むこともありますが、出品の方向性として似たような作品があると、それに対する疑問も湧いてくる。こうした矛盾、錯綜するいくつかの要因があるかもしれません。それにしても、皆さん一様におっしゃるのは、それらを克服(?)して北海道書道展によって育てられたということですね。

北海道書道展の魅力とは何か

司会 今までのお話と重複するかもしれません、皆さんにとっての道展の魅力についてお話しいただけませんか。佐々木 道展は、現在6部までのジャンルの総合公募展ということで、非常に幅のある展覧会というのが最大の魅力だと思います。特に5部などは市民権を得るまでに大変な歴史があったようですが、北海道では創立から今日まで設けられてきたわけですね。そんななかで、特に私の場合は人生の節目に沿うように道展で育てられ、運良く会員にま

でなれた。もし他県にいたら、つぶされていたか、あるいはやっていなかったかもしれません。ありがたい恩師や仲間との出会いがあった、これも、道展の魅力だと思います。



千葉 和子

越坂 私は全国の公募展を見てきましたが、道展の魅力といえば、北海道の風土が作風にかなり影響していることだと思います。のびのびとした線や構成は、他県とは違う北海道ならではの傾向とありますね。また、道展といえば北海道を代表する

公募展ですから、出品によって技術向上の足跡がはっきりとわかる。年に一度の節目ごとにレベルアップする様子が、作品集や会場で目を通して記憶に残るのが魅力だろうと思います。確かに、道展は年々出品数が増えハードルが高くなっていますが、それをいかに乗り越えステップアップして行くか。それもまた魅力なのじゃないでしょうか。

清兼 一般にはいわゆる社中で出品する公募展が多いと思いますが、道展はあくまでも個人出品。それが最大の魅力だと思います。結局は自分がどう関わるかですね。公募展だから云々というよりも、そこに自分がどう関わるかが問題だと思うんです。僕自身は、書を通して“モノをつくる”というのを学んだことは大きいと思います。

青木 公募展で関わっているのは基本的に道展だけで、他の公募展のことはよく知りません。ただ、いろんな噂を聞いて「そんな世界なのかな」と思ったことはあります。それを実感したのは、昔テレビで放映されたある絵画展の番組ですね。審査員が集まり、いわば組織同士の談合のような形で審査していく風景だったんです。そういう物差しで道展を見たときに、道展のいちばんの魅力は“公平感”じゃないかと思うんですね。個人、団体に関係なく、抜きん出たものを書けば認められ、作風の振幅もかなり許される土壤がある。今後も、公平感や懐の深さが永く維持されればと思います。

千葉 道展の魅力といえば、一般の人と直結していることじゃないでしょうか。他の書道展の会場では、いつも顔見知りの方たちとお会いするんですが、道展では全く知らない方とお会いする機会も多い。その意味では、必ずしも書道をやっていない方でも気軽に見ていただける展覧会だと思います。ただ私自身、これまでかな部で出品していた立場としては、層が厚くハードルが高いというのが辛い部分もありました。かなはある程度書き込みが必要で、年齢が高くないとなかなか出品までは至らない。若い人たちの層が薄いせいか、出品数も少ないですね。

司会 かなをやっている若い人が少ないと、指導の問題なのでしょうか。それとも、若年人口が減っている

のが原因なのでしょうか。

千葉 やはり絶対数の問題でしょうね。かなをやっている人は多いんですが、年齢的に若い人が少ないのじゃないかと。私の周りの社中を考えてみても確かに少ないので。また、楽しんでやるレベルか



矢野 鴻洞

ら道展に出品するレベルになるまでには、すごく大きなジャンプが必要だと思うんです。

司会 それはもしかすると、あらゆる伝統文化に共通する問題かもしれません。普及や教育を含め、どうやって若い人を取り込むかということですね。

矢野 僕は他の先生とも共通しますが、道展のいちばんの魅力は作品同士のぶつかり合い。作品においては下剋上もあり得る（笑）。そういう土壤をつくってくださった先達の見識の上に、我々がやってこられたのじゃないかと思います。

司会 なるほど、作品本位ということですね。お話をうかがうと、指導者の影響というのは多分にあるようですね。書というのは非常に規範性が強く、熟成度の高い芸術というか、行き当たりばったりのパフォーマンスではできないのが書の宿命でもあります。こうした伝統性と芸術の原点である自己主張との相克から、新しい作品が生まれるのかもしれません。

北海道書道展・変革への夢

司会 さて、今までのお話を踏まえて、北海道書道展を今後より魅力的に発展させるにはどうすればいいか。ここでは受身でなく、ぜひ皆さんの主体的なご意見をいただきたい。せっかくの場ですから、最後に思いきって夢を語ってみませんか。

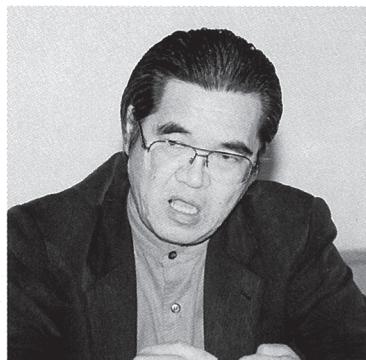
矢野 部門を超えて作品同士がぶつかり合える道展ならではの奥行きある土壤を、21世紀に受け継いでいかなければならないと思います。私も教育に携わる者の一人として、若い人たちの考え方や環境の変化を目の当たりにしますが、書に取り組もうとする若い人たちに魅力ある展覧会するために何をしたらいいかと考えています。たとえば演劇や絵画などを見たいという人はたくさんいるわけですが、書においても、自分は筆を持たないがいろんな作品を見てみたいという人をどう取り込むか。これからの時代、中高生がインターネットなどで気軽に書に親しめるという環境も、一つのきっかけになるかもしれないですね。

司会 インターネットでホームページを開くという意見ですね。書の展覧会の場合は、関係者しか見に行かないということも多分にあります。そのへんについてはいかがですか。

か。

青木 たとえば、札幌コンサートホール『Kitara（キタラ）』ができることで、より質の高い音楽会が開かれ、札幌にいい音楽家が来る機会も増えたと思います。そういう意味では、やはりハード面の整備も大事ですね。札幌で催し物があるとあまりにも不便な場合が多い。道展全部を見るというのはエネルギーとしても大変だし、気軽に見られる条件が整っていないと思います。たとえば大通公園の近くなどに文化施設があれば、もっと気軽に見られるのでは。札幌は大都市であるにも関わらず、文化的なハード面では遅れていると思います。道内で北海道書道展に並ぶような規模や内容を持った展覧会はないわけですから、将来的にすばらしい文化施設ができて、それを活用することで広がりも生まれるのではないかと思います。

また、ここ数年の道展が急激に大所帯になってきたのも気になりますね。底辺を広げるというのは悪いことではありませんが、目先の利益だけを追わないようにしたい。もう一度原点に戻るというか、本来るべき姿を出品数に求めるのではなく、質を大事にするよう考えていきたいですね。

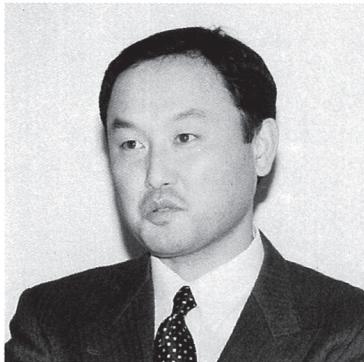


佐々木信象

佐々木 いまは昔と違い、各部1点ずつしか出品できなくなっています。本来は、そうした物理的な面で妥協することのない展覧会にしなきゃいけないと思うんです。また、特選あるいは秀作について、審査を公開してはどうでしょう。優れた

作品をどういう先生が推薦したのかなどを公開できるくらいの展覧会にしていきたい。昨年はグランプリの審査を公開しましたが、公募の特選・秀作なども同じようにすべきで、それが道展の魅力になっていくのではないか。また、若い人の出品が少ないということに関しては、出品料の高さが問題かもしれません。入選すればさらに表具代がかかるし、材料費も入れると結構な金額になる。若い人たちがもっと応募しやすい方法が必要だと思います。

千葉 若い人たちの書く意欲、発表する意欲を維持するためには、道展をもっと気軽に見てもられる場面が必要だと思います。期間中の新聞掲載以外にも、たとえば道新ビルのウィンドウに今年の大賞作品が展示されるなどの身近な雰囲気づくりですね。また、現在は会友の数が非常に多く、長く続ける意欲を喚起するような目標が少なくなってきている。たとえば会友向けに奨励賞などがあれば、励ましの意味を込めた“道標”となるのではないか。また、会友作品からグランプリの選考にあたるときに、各部で推薦する候補数に制限がありますね。内容がいいときには多



越坂 久雄

く推薦したい。責任を持って選ぶ以上は、途中の選考段階で数に制限を設ける必要はないと思うんですが。

越坂 今回のように、40回展など節目の展覧会にはぜひ目玉がほしい。たとえば、過去に道展を支えた方々の遺作を掘り起こして展示

するなどのイベントがあれば、北海道に書の風土を築き上げた作家の遺作展ということで、書道に精通しない人でも展覧会に足を運んでくれるような気がするんです。今後は、もっと企画力が大事になってくると思います。

また、いまのようなコンピュータ社会では、若い人たちが“手で書く”ということからどんどん遠ざかっていますね。書というのは、モノをつくるというのが原点だと思うのですが、機械文明が発達する時代にこそ、書に携わる人の作品づくり、手仕事に賭けるエネルギーをもっと発信しなければならないと思います。

清兼 以前よく感じたことなんですが、会員の先生は常に審査する立場ですよね。いっそのこと、会友が会員の審査をしてはどうかと思うんです。そうなれば、会友も真剣に審査しなきゃいけないし、会員も真剣に書かないと恥ずかしい。会友から「またあの先生は同じ作品を書いている」と言われたくないから、会員も「見られている以上、頑張

らなくては」と力がこもる。公募から会友になるときに“卒業する”なんていいますが、本来書に卒業はないわけですよ。常にそういう気持ちで取り組むことは大事だし、そうしたお互いへの厳しさが、公募作品を審査する眼にもつながると思うんです。

司会 いまの話だと、会友・会員も含め、皆公募のスタイルでやることも考えられますね（笑）。僕が昔、運営委員会で発言したのが、「作品の大きさを3倍くらいにして入選率を1、2割にしては」ということ。これは理想論かもしれません、啓蒙、普及の公募展は沢山あるので他の展覧会とは違う道展の位置づけを明確にし、入選の価値そのものを高めるということなんです。皆さんからはもっと非現実的な意見が出てもいいと思っていましたが（笑）。そもそもいかないのはよくも悪くも伝統の持つ重みでしょうか。それは先達に感謝しつつ、大事に育てていかなければならぬことでもあると思います。今回は、皆さんそれぞれの道展に賭ける思いが感じられ、次代を担う皆さんに期待するところ大、でいい座談会になりました。本日は大変ありがとうございました。



辻井総務部長



第50回北海道書道展 特集

座談会

テーマ

北海道書道展の存在意義とその魅力 ～普及と隆盛に向けて～



日 時 2009年3月28日（土） 午後2時

会 場 北海道新聞社 特別会議室

出席者 発言者 河原 啓雲氏（苫小牧市）第1部 漢字多字数
成田 成峰氏（登別市）第2部 漢字少字数
川口 眑子氏（恵庭市）第3部 かな
鈴木 大有氏（函館市）第4部 近代詩文
湊 天邦氏（旭川市）第5部 墨象
小泉 和雄氏（岩見沢市）第6部 篆刻・刻字

司会 阿部和加子氏 第50回北海道書道展運営委員会総務部長
オブザーバー 羽毛 蒼洲氏 第50回北海道書道展運営委員長



河 原 啓 雲

司会 お忙しい中、遠方の函館はじめ、登別、旭川、苫小牧、恵庭そして岩見沢からお越しいただきありがとうございます。ご案内の通り、「北海道書道展の存在意義とその魅力—普及と隆盛に向けて—」と題して、皆さんの熱い想いを語っていただきますよう、よろしくお願ひ致します。

では、テーマに入る前に、きっかけとして、皆さんが書道に入られた動機等からお話を伺わせていただけたらと思います。鈴木先生からお願ひ致します。

鈴木 僕は全く書道に触れない中で過ごしていたんですが、大学受験の時に書道科を受けてみたら偶然受かりまして。大学に入ってから習字と書道の違いというのに初めて触れ、それが書道の世界に入るきっかけになったと思っています。

それからは、友人の古谷玄山先生や、恵まれた環境の中で育てられて、皆さんに支えられながら続けて来ることが出来たと思っています。

司会 大学に入られたのがきっかけということですね。普通は、書塾や高校で書道に出会ったことが導入になると言われていますが、先生の場合はユニークですね。

鈴木 それこそ、これから書道を始められる方の参考になればと思うのですが。書道の場合は、表現活動ですので、ある程度自我が目覚めてからでも決して遅くはないと思います。もっともっと後からでも結構ですし、退職されてから、今まで歩んできた人生を振り返ってからスタートされてもいいと思います。

司会 参考になるご意見だと思います。同じく高校の先生をしておられる湊先生はいかがですか。

湊 僕は書塾で小学生のころに習っていましたが、途中で辞めてしまいました。自我が目覚めて、ということになると、高校2年の終わり頃に、同じクラスの人に入部活に誘われてなんなく入りました。

同時に当時、塩田慥洲先生が主催していた墨原社にも顔を出してみないかと誘われ、毎週のように顔を出し、少しづつ面白さもわかってきました。それから今まで続けてきた、というのが本当のところです。

司会 やはり高校時代の感性が大きく作用するようですね。苫小牧の河原先生のきっかけは何でしたか。

河原 僕は単純に友達が行っているという理由で書道塾に行き始め、高校3年まで通いました。中学の頃は、学校の掲示物を毛筆で書いて、みんなに喜ばれたり、また職員室に呼ばれる先生の代筆などもして褒められたことが続けてこられた力だと思うのです。

高校に行って美術部に籍を置きながら、授業の選択科目として書道をとりました。今までの習字と一変して古典というのに触れ、文字が隸書、篆書など色々なものがあることにびっくりしました。

そういう書道の魅力みたいなものをどう理解しているのか、どういう風に書くのかという興味が湧き、その頃、教えて下さった道展会員2名の先生の筆さばきを見た時、筆が躍るように書いているのを見てびっくりした覚えがあります。その頃から、「書」ってすごいなと思い始め、真剣にやってみたいと考えるようになりました。

司会 おっしゃられた通りにやはり高校時代の感性がすごく大事なことかもしれませんね。登別の成田先生はいかがですか。

成田 私の家はゲタ屋で、小学校6年くらいの時、父に「お前は長男だから後継ぎだ」と言われまして、「商売をやるにはどうしても文字を書かなければいけないんだから習字を習いに行け」と無理やり塾へ通わされました。

塾へ行きましたら、褒めの哲学というか、先生が「お前はうまい」ということで丸をつけてくれまして、気分を良くして習いに行くというようなことでした。その後、進学の勉強をしなくてはならないということで、中学2年くらいで一度やめてしまいました。その後、冬休みの書き初めの宿題があり、自分で色々書いて出してみました。割といい成績ということで、書に対するイメージは良かったです。

高校へ行きました、3年の時に選択科目があり、そこで書道を選択するわけですが、好きだったということもあり教科担任の先生が「なかなかお前うまいな、書道部に入れよ」ということで誘われ書道部に入りました。当時、日本書道美術院展を日書展と言っておりまして、書道部から多分あのころで十何人か出したんですが、私がちょうどうまい具合に特選に入り、それがきっかけで今まで続けてこられました。



川 口 瞳 子

司会 河原先生や成田先生の話を伺っても、褒められること、自分が楽しく感じること、そして塾のような受け入れ場があること、それがすごく大事なことです。それでは川口先生いかがですか。

川口 子どもの頃から文字を書く事は嫌いではありませんでした。中学1年の時、柴田恵山先生のご自宅に2年間通いましたが、その後、中断してしまいました。

結婚して夫の何回目かの転勤で俱知安町に住むことになりました。私も30代に入っていましたので、一生関わっていけるものを持たないと、という思いが強くなっている時でした。地方の町でも書道の先生はいらっしゃるだろうと、軽い気持ちで文化センターへ行き、そこで中野隆司先生に出会いました。

先生から、「一生書道から離れないで欲しい。かなを勉強してみる気はないか」と言われ、松本暎子先生へ道をつけて下さいました。かなを始めて、一生関わっていけるものはこれだと思い、40歳を超えてから本格的に始め、今日に至っています。

司会 小泉先生は篆刻部門を担当していらっしゃいますけど、篆刻を始められたきっかけを話していただけますか。

小泉 私は小学校のころから書道をやってきました。それで高校に入る春休みに、大丸藤井で、どういう訳か印刀を買いました。その頃私の先生は丸山薰風先生で、その時に先生が、新しい会員が入ると、河原などで粘土の固まったような砂利を拾ってはコンクリートの上で擦って、それに印を彫っていた姿を見て、見よう見まねで石を見つけては彫っていました。

そして、道展の25回展の時に越坂柳徳先生が解説をなさいました。最初、20人近くが後について歩いてたんですけど、解説が半分位になる頃から、1人抜け、2人抜けして少なくなり、最後になって私1人になってしまいました。解説が終わった時に先生が私に「君、篆刻をやっているのかい」と言われました。

それから2ヵ月近くたちまして、書道教室に行きましたら、そこに柳徳先生がいらしたんです。そこで「これから岩見沢で篆刻の教室をやるから小泉君もやりなさい」と言われ、道展に出品して秀作を受賞の時に「小泉君、柳徳先生に君を預けるから、これからは篆刻を中心にやりなさい」と言われたのがきっかけです。

◆ ◆ ◆

司会 北海道書道展が各地域でどのくらい知られていますか。そして皆さんが出展したきっかけをお聞かせいただけたらと思います。

湊 高校時代に顔を出した墨原社は会員の人たちが若く精力的にやっていました。毎週のように顔を出すと、誰かが先生のアトリエで書いていましたから、自分も抵抗なく書くことが出来ました。

実は墨象は道具が全部高く、筆は今ですと10万円位ではなかなか買えません。ごく一般的な書道道具を持って通っていると、周りで墨象をやっており、「お前見るだけなく書いてみたら。おれの道具貸してあげるよ」と誘われて。「貸してくれるなら、やってみようかな」というのがきっかけです。

高校生が自分の筆を持つこと自体無理なことで、自分で筆を買ったのは20歳ぐらいになってからです。そんな形で墨象への道が始まりました。道展については、書いたんだから出せば、という程度ぐらいでした。

司会 函館の鈴木先生の場合はいかがでしたか。

鈴木 僕は本当にど素人でした。大学1年生の時は全く道展は夢のまた夢で2年生の時にやっと出品したのが、昭和53年の展覧会でしたね。

先輩からは、入選すること自体が難しい展覧会と聞いていましたので、大変なんだなと思っていました。全国展、地方展、そして地元の展覧会と3つに分けて出品する中でも、北海道書道展は全国で最も大きい地方展だという話も聞いていましたので、ただ無我夢中でぶつかるぐらいの気持ちで出品したのを憶えています。

司会 苫小牧の河原先生は道展をよくご存知でしたか。

河原 僕も全く道展のことを知らなかったんですが、どうやって書の道で生きていけるかを考えていた時に、北海道書道展という存在を知りました。出品して、どんどん入選入賞して上に行かないと書の世界では生きていけるもんじゃないと言われ、その時に初めて北海道書道展が大きな展覧会で、大変レベルの高い展覧会なんだなと思い、すぐに出品してみました。それが20歳



成田 成峰

の時でした。

手本を真似ればなんとかなると思っていたのですが、北海道書道展を一度も見たこともないままに出品したら、やはり落選でした。その後、実際に道展を見て、いろいろな作品が何部門にもわたってあり、それぞれに強烈な印象を受け、書に対する興味は自分の中でさらに盛り上がっていきました。

司会 登別の成田先生はいかがですか。

成田 日書展への出品は昭和34年ですから、今から考えるとずい分早い時代なんです。そのころは道展のことは全く知りません。

私の手元には道展の9回展の作品集があり、その頃から関心をもっていて、13回展から出品しています。

今でも忙しくて書かない時も無理やり締切に合わせて書いて道展・創玄展・毎日展・地元展と年間7~8回出品しています。道展は地方でも移動展がありますので、室蘭でも登別、白老、伊達でも愛好者の皆さんに認識されています。

◆ ◆ ◆

司会 移動展を開催することは、書の普及・隆盛の為に地域へ貢献していると思われますか。

成田 それはあると思います。というのは、展覧会に出品しないで、書道をやっている方は地方にはいっぱいいます。多分、道展に出品していない人の方が多いと思います。そういった方も移動展があると、鑑賞に行くでしょう。そういう意味では関心が高まります。しかし、鑑賞者全員が次に出品するかというと、そうはなかなかいきませんが。

司会 川口さんは何がきっかけで出品しましたか。やはりお稽古に通った先生に勧められての出品ですか。

川口 そうです。周りが当たり前のように出していましたから。先生が勧めて下さったので、ああ、出さなければいけないと、何の疑問も持たずに出品しました。

湊 旭川では昔2~3回あったけど、今では札幌ー旭川間がJRで1時間20分ですので、むしろ開催する負担の方が大きかったようです。

司会 旭川では移動展よりもむしろ本展の方に来る人が多いのですね。岩見沢はいかがですか。

小泉 岩見沢でも一度やったことがあります。ちょっと異色だったんですが、岩見沢の書道連盟と道新が主催する、南空知ファミリー書道展を毎年やっており、今年で33回になります。それをミックスして、岩見沢のスポーツセンターでやりました。体育館に全部パネルを張るのも大変ですが、3つの展覧会をやった結果、すごく反響があり、たくさんのお客さんが入り、我々もびっくりしました。

司会 移動展がない地域で、どうしたら書の普及に貢献できるか、その為の希望や要望はございませんか。

川口 恵庭では23分で札幌。それ位近いところの地方では大きな何かをするというのは難しいかもしれません。過去に千歳で移動展を2回ほど行ない、恵庭、千歳の会員、会友の先生たちが主になって準備をいたしましたが、なかなか大変でした。

ただ良かったのは、書道をやっていない方たち、書道をやっていても道展に出していない文化センターの生徒さんたちが解説を聞きに来てくださったり、そこで興味を持って、書に対する関心が深まったように思います。

司会 函館は毎年、かなりたくさんの人が移動展に来ますが、いかがですか。

鈴木 移動展は費用や労力の面では大変ですが、函館は札幌まで遠く、わざわざ札幌まで見に行く方は多くないので、意義があると思っています。

また私は高校の教員をしていますが、書道の授業の中でも鑑賞という分野があり、書くだけでなく見ることも勉強として鑑賞の場を与える。市内の展覧会も当然見に行かせますが、道展は6部あり、色々な分野の書が見られます。そういうものも生徒に見に行くよう指導できますし、若い人への啓蒙の役割も移動展は担っていると思います。

◆ ◆ ◆

司会 今年の50回展から、16歳から出品できるようになり



鈴木 大有

ましたが、高校生に出品を促す何か良い方法がありますか。

鈴木 出品したいのはやまやまなんですが、高校生ですので、やはり金銭的な面が問題です。軽減措置があれば声もかけやすいのですが、道展の場合は当たり前にかかりますから。大人と一緒に何万円もかかる出品料は、高校生にはなかなか親の理解も得られない。

やはり今後、高校生の出品ということになってきますと、軽減措置があれば有難い。北海道は高等学校文化連盟書道展がありますが、全国でも書道は盛んな地域です。高校生の人数は結構いますので、道展への出品の下地はあります。

司会 子供さんをたくさん指導しておられる河原先生のご意見はいかがでしょうか。

河原 高校生には今のような金銭問題は自動的に出てきますね。社会人になってからでも、それだけの費用を投入させ道展出品を勧めることも大変ですが、自分のところでは積極的に挑戦させています。

さらに中央展にも出品させ、色々な作品群の中で自分の書を見つめさせ、書の見聞を広めながら興味を持って前に進んでもらいたいと願っています。小学生の時から指導している生徒が多いので、一人でも多くの子供たちに書道の素晴らしさを教えてているつもりです。

司会 小泉先生がお住まいの岩見沢は教育大学の書道科があるので、環境的には土壤がならされていると思うのですが、若年層から高齢層までの参加者の意欲という面ではいかがですか。

小泉 岩見沢は書道人口が多く、書道連盟展や書き初め大会、席書大会などが企画され、先生方の書写教育連盟もあります。私は文化センター講座、高校の講師をしていまして、その中で書の他、篆刻の時間を多くさせ



湊 天邦

もらっています。そこで、普段は学生が味わえない大きな石も持ち込み、大きさも7.5センチとか6センチのを実際に取り入れています。

司会 石に触ることで、篆刻への興味を引き出して、それが道展や書道の文化に貢献することになると望ましいですね。成田先生は登別の書道連盟で盛んに活動されておりますが、そちらの方での北海道書道展に対する働きかけや、移動展の必要性をどのようにお考えですか。

成田 登別は『小中学生書き初め展』をずっとやって、来年40回展になります。当初は200~300点くらいの出品があり、協賛金という形で当初300円、その後500円いただいていました。ところが出品点数が400点くらいまで上がって、それ以降減り続け、100点を切りました。

そこで4~5年前にアンケートを教育委員会にお願いして各学校に出し、集計したら、「出品料が無料だったら」という意見が多く、色々工夫しまして、文化・スポーツ振興財団と書道連盟が共催という形で会場費など経費を節減して、翌年から無料にして募集したところ160点、翌年300点、今年は500点になりました。

しかし、会員の高齢化で作業の負担が重く、来年は出品者の父兄にボランティアをお願いすることを考えております。そして底辺の拡大をはかり、それが道展につながってくれればいいなという思いを強くしています。

司会 底辺拡大の為には若年層から種をまき、その種が木になるまでには時間がかかると思います。時間がかかると活動している先生も歳をとってしまいます。年齢と経済の問題はいつでも会員の心に留めておかなければならぬ問題ですね。

川口先生の恵庭では小さいお子さんが少ないと聞いていますが、いかがですか。



小 泉 和 雄

川口 市民講座や文化教室などに通われている方も、子供さんのことでお金がかかるとご本人もやめてしまします。やはり経済的なことは大きいなと思います。それと特別な人が書道をやっているという感覚が、どこかに皆さんお持ちなんですね。なかなか難しいですね。

司会 篆刻において底辺拡大を目的とした活動を教えてください。

小泉 篆刻とか、石を彫るというのは、人數的に限られた、本当に興味ある人しか入って来ないです。ですから、少しでもそれを打開するために声がかかると、苫小牧、札幌など講座をやり、あと全道色々と印材を扱っているところに行って、体験していただいている。ある先生は帯広・清水など遠方へ、刻字の先生は地域から札幌へと活動をしています。

書の人が一生懸命古典を臨書するように、我々も時代時代の印を勉強することによって一つひとつの字を正確に歴史を追った形というものが勉強できると思うんです。

◆ ◆ ◆

司会 中央の展覧会から見ますと、北海道の墨象は実にユニークだという話をよく聞きます。湊先生、その魅力についてお願いします。

湊 北海道でいう墨象というのは多分、中央でいう墨象でないような気がします。

中央でいう墨象というのは非文字の作品を一般的に墨象といいます。北海道の墨象というのは、文字を書いてますから多分、漢字の一分野のような気がしています。自分自身の中では、じゃあ何が違うのかというと、表現そのものの大きさだと思います。体の中から湧き起こるエネルギーそのものです。

表現により墨も基本形は2種類あって、1つは木工用ボンドを使うもの、もう1つはゼラチンというか、

膠（にかわ）を使うもの。

ちょうど道展の締切が2月。冬にかかるんで、膠をベースにして墨を使うのは割に可能です。ところがそれを使うには室温が氷点下でないとなかなか良い色が出てきません。だから私自身、冬は毎日の天気予報の気温が気になりますし、スキーのつなぎのような服を着て、耳当てのついた帽子をかぶった格好で書きます。室温が氷点下ですから。

司会 北海道の独自性とか風土性ということで近代詩文は、かなり北海道に根ざしたタイトル、題材などを扱っていますが、その魅力はいかがですか。

鈴木 人それぞれ意見が違うように、その人なりの字があつていいんじゃないかなと思います。近代詩文書という分野は、普段使っている言葉を書きますので、その意味では入りやすいのではないかでしょうか。

それから言葉の意味と言葉から受けるイメージを書に託していくというが多くあります。北海道の自然、風土に生活して自分の中に大自然の雰囲気を取り込みやすいこともあります。そういう意味でも高校生や若い世代に受け入れられていると思います。自分自身も北海道・函館ですので、青森も含めて東北、北海道の北の大地の雰囲気を題材にすることが多いです。

司会 河原先生は、自分が好きと思われた書道人生を走って来られてますが、ご自身、書の魅力を子ども達にどのように教え伝えようとしていますか。

河原 今、近代詩文の話の中で、北海道の風土に根ざしたということがありましたが、漢字も同様だと思います。いろいろな書風、書表現の中で多角的なものの見方を書を通して経験できるというのも書の魅力の一つだと思います。

今、自分のところの公募展出品者は小さい頃から書を続けてきた人が多く、今回の道展でも出品者の平均年齢が40歳前後だと思います。高齢化、高齢化といわれる中で、若いグループで挑戦しようという人たちが多いというのは、小さい時に教育文字から入って、書道芸術という違う魅力にぶつかったことによるものだと思います。

その子どもたちが、次の書道を担う世代と考えているんです。今、少子化と言われていますが、何となく親の関心の方が薄いんじゃないかな。子供の減る量より、親の興味、関心度が減っているという風に僕は認識しています。

そこの部分をどう埋めるかというのが今後、北海道書道展だけじゃなくてすべての展覧会、書道界の発展に通じる一番の問題点じゃないかと思います。

司会 成田先生にも、ご自分の書に向かわれる姿勢と思いを語っていただければと思います。

成田 それぞれ独特な書風の方がいらっしゃいますから、それらを見ながら、次は自分の作品はどうあるべきか、という具合に考えたり、少しでも見てくれる方に感動を与える字を書いていきたいなと思いながら頑張っています。

司会 かなの分野の川口先生いかがですか。

川口 かなの魅力に取りつかれてしまう人はたくさんいらっしゃいます。ただ、それを長く継続するというのは大変難しいことだと実感しています。

線、文字表現だけではなく、構成や紙など総合的センスが問われ、こんなに難しいと思わなかったと必ず言われます。難しいものはだからいいのよ、苦労して手に入れたものは喜びも何倍も大きいのよ、簡単に手に入るものは喜びも一時のものなのよ等と、お話をするのですが、なかなか理解していただけません。

その深い大きな世界を少しでも沢山の人々に触れていただきたいと思い、地元の石蔵倉庫、夢創館で、3年毎の社中展を行い、今年は7回目になります。その他、図書館で、小品展、秀作展等も開き少しでも書道に関心を持つ底辺の拡大になったらと考えています。

美しい世界ですし、何よりも日本の女性が作った文字です。その魅力を是非後世に伝えていきたいと思っています。

◆ ◆ ◆

司会 皆さんの住む地域で、もっと道展を盛んにしていくとか、もっと前に進めていこうという気運を感じいらっしゃると思いますが、どうすればその気運がもっと湧き上がるのでしょうか。何か少しづつでも道を切り開くきっかけになるとよいと思いますので、皆さんのご意見をお聞かせください。

小泉 今年、篆刻・刻字部門は、準大賞者がいました。次回から審査員が8人になります。今、篆刻・刻字は集中した地域でやっている方が中心なので、少しでも今の範囲を広めたいのが願いです。それを模索しています。

湊 墨象部門はかなり環境が厳しい。仕掛けが大きいという部分では制作する会場がなかなか見つかりません。

また、筆が欲しくて、筆屋さんに注文しますが、良い原料が少なく、職人もいなくて筆が作れないと言います。筆職人が育っていない、筆の軸を作る人が実はいないという話を聞きました。墨象の筆はオーダーメイドで、注文してもなかなか出来上がらない。



羽毛蒼洲運営委員長

それでもみんな、頑張っていて、旭川や深川で5部の道展会員だけの展覧会が企画されていますので私も参加していますし、ほとんどの会員の方が自主的に参加しています。旭川での展覧会は、今年7月で7回目になります。

鈴木 これから書道展の課題は、やはり書道をする人を増やして行きたいというのが、みんなの共通の願いです。一番最初に僕らのやらなければならないことは、指導者の育成だと思います。

書道を始めたのは、子供の頃から書塾に通ってという人が多かったように、やはり動機付けの点からもお子さんを教えるという方々がいらっしゃらなければならない。指導者育成という点で、北海道書道展は非常に大きな役割をもっているのではと思います。

北海道という土地はやはり書道をやる中で、北海道書道展で、しのぎを削って会友、会員に上がられた方々が各地域での指導者としてやっていかれることが多いと思います。そういう意味で、北海道書道展は北海道の書道地盤を支えてきた展覧会だと言えます。

司会 河原先生の塾ではお子さん同士が励まし合ったり、先輩が後輩を励ましたり、また、その中から先生の様な立場の方が生まれたり、そういうことがございますか。

河原 そうなれば一番いいですね。鈴木先生がおっしゃったように、北海道書道展は北海道の書を支えてきた中軸の公募展として一番地域に根ざした展覧会と認識しています。

さらに、長年にわたり北海道の文化面をリードし、大切な役割を果たしてきた展覧会です。この伝統と歴史のある北海道書道展が今まで以上に隆盛に向かうことを期待し、今日の話を参考にして、もう一度、自分のやれることを再確認し、努力したいと思います。

司会 成田先生はいかがですか。

成田 今の書道の隆盛があるのは私たちの先人が偉かったお陰だと思っています。「文部省に書をぜひ必修科目に」と運動を展開し、小学校3年生から書道が必修科目になりました。それが、今の書道の繁栄につながっていると私は考えています。

先ほど、小中学生の書き初め展をやって底辺を拡大したいというのはそこから来ています。これからもそういう底辺の拡大が必要だと思います。鈴木先生がおっしゃったように、熱心な指導者はいなくてはいけませんし、指導者の育成も必要です。同時に地方都市も、北海道全体も、小中学生という底辺の拡大が非常に大切です。

近年、書道特区というものが認められてきました。小学校3年生の必修科目を1年生から行ってもいいということです。これを是非、北海道書道展に出品している指導者のみんなが力を合わせて、書道特区実現の方向を作り出していくと、もっと書道文化が発展するだろうと考えております。

司会 札幌の上田市長は、予算をとって、市内の小学6年生をキタラに呼ぶんです。音楽文化を子どもから根付かせようと札幌市はそういう風に札響を応援する。札響は何をするかというと、津々浦々まで出かけていて、本物の生の演奏を聴かせようとする。

そういう動きが北海道書道展の中にも生まれてくれるといいと思っております。



阿部和加子総務部長

鈴木 まだまだ埋もれている作家が北海道にいっぱいいると思います。そのような作家も道展に出品して頂けるような、認識して頂けるような方策を立ててもらいたい。そしていつまでも「良いものは良い」と認める展覧会であってほしいと思います。

司会 今日はとても楽しい座談会になったと思います。それぞれの地域から発せられる要望を道展の進むべき方向に役立てていけるよう、皆様ご自身も主催者もみんなで努力して進んでいきたいものだと思います。

本当に貴重なご意見をありがとうございました。



第60回記念北海道書道展 座談会

テーマ

時代に生きる北海道書道展の方向性 ～未来に繋がる書道文化の展望～



日 時 2019年5月3日(金) 午後4時
会 場 札幌パークホテル

出席者 発言者 本間 太洲 氏 第1部（漢字多字数）
松永 律子 氏 第2部（漢字少字数）
菅原 京子 氏 第3部（かな）
大川 一濤 氏 第4部（近代詩文）
上戸 抱山 氏 第5部（墨象）
野坂 武秀 氏 第5部（前衛）

司 会 越坂 久雄 氏 第60回記念北海道書道展運営委員会総務部長
オブザーバー 石原 北陽 氏 第60回記念北海道書道展運営委員長
第6部（篆刻・刻字）
第4部（近代詩文）



石原 北陽 氏



本間 太洲 氏

司会 座談会を始めさせていただきます。最初に運営委員長の石原先生、ご挨拶よろしくお願ひいたします。

石原 皆さん、こんにちは。今日はよろしくお願ひします。我々は「点と線」をつないで、無限に作品を作り出します。それが書道だと思っています。「点と線」、これは物事もしかり、どうやって繋いでいくか。どのようにこれから北海道書道展（以下、道展）を繋いでいけばいいのだろうか、そんな前向きな話、そして生きた議論を期待しています。

1. この10年の改革

司会 それでは本題に入ります。まず、複数出品の復活^{*1}についてご意見を頂戴したいと思います。

本間 以前のように複数出品にチャレンジするっていうのか、傾向を変えて作品を出すというかたちのエネルギーを皆さんなかなか持てなくなっていると思います。1点は無難なところで、もう1点はちょっと冒険してと考えて、複数出品で数が増えていけばいいんでしょうけれど、実際にはなかなかそうならなかったというのが僕の中のイメージですね。

大川 近代詩の場合はどうちらかというと、アイデアだったり構成だったり、結構大きな表現のポイントになると思うんです。そういう意味では実験ができるというか、こういう作品はどんな評価を受けるんだろう、ということで複数出品は歓迎だと思います。

司会 続きましてU23^{*2}について、どういうような広がりを持ったかということで、菅原先生お願いできますでしょうか。

菅原 私は女子校で書道の授業を持ち、かなのいろいろ

なものについてチャレンジさせ、褒めたりすると、すごく喜んで「私、かな好きかもしれない」と言ってチャレンジする子が1年に何人か出てきます。女の子ですと、就職したり結婚したり子どもが生まれたりということで、なかなか続けることができないんですけど、ちょっと休んでいたけど復活するという子が何人か出てきました。それは嬉しいなと思っています。そのきっかけ作りをたくさんしたいとは実感として思っています。

司会 個人的に教えている中で、U23とそうやって接し合うような場というのは、これからどういうふうにしていけばいいんでしょうかね。

松永 難しいですよね。私が教えている人たちは、奥様方や、定年した男性の方がほとんどなので、若い人たちが入ってくることがまずないです。

上戸 墨象の場合は、簡単に筆を持てないというネックがあって、ちょっと難しいところもあると思います。これから少しでも打破していかなければならないんだろうと思います。

野坂 5部に去年から入り、実は去年、今年と賞を取ったり、入選した子の中に、高校卒業の記念に出したっていう子が何人かいます。そういう点では高校時代に出す子は、金銭的にはちょっと厳しいところもないわけではないと思いますが、やっていくうえでは非常にいいのかなって。

大川 U23と今ひとくくりにしているんだけれど、U23は、16歳から18歳の高校生世代と、19歳から23歳の大学生世代と事情が全く違うと思う。問題は高校生世代のところですよね。高校卒業した途端に環境は激変するんです。書く場所はない、どんな紙を求めるか、筆を求めるか、筆を求めるには月謝がかかる、先生を求めるなどいろいろ



松永律子氏



菅原京子氏

いなどとなってくる。この壁をどうやって越えるかです。そういう意味では、この道展に、高校生世代のうちに出品して、挑戦させるという夢をみせることは、良かったんじゃないかなと思います。

本間 僕は何か青田買いみたいな印象があって、ここはまたちょっと違う世界なんじゃないかなっていうふうに思った人間なんです。ただ何年かやってみて、若い人たちのエネルギーみたいなものが注入されて、展覧会場へ行っても、励みというか、明るいニュースにはなりますよね。そのときにちょっと出してきっかけを作つておけば、どこかでまた戻ってくる可能性はあるのかな。

石原 4年前に運営委員長を務めたときの理事会で、議論は出品料になり、出品料を下げようということになったわけです。そうやって高校生の今の出品料が決まり、出品しやすい環境を整えていったんです。でも、それだけで高校生が出品するかというと、そうではない。何が必要か。先生方が動かなければ生徒の出品は生まれない。個々の先生方の具体的な動きの中で今の出品点数があるんです。まずはいろいろなことをあまり期待しないで、高校生の時に一生懸命道展に取り組んだという体験と、仲間で共有した感情を記憶させる。それでいいんです。そうやって具体的な目標を掲げて頑張ったことが1つの突破口になったんじゃないですか。

司会 次に前衛書の参加^{*3}ですが、59回展よりですね。前衛書が加わっているのが5部ですね。

上戸 私が最初にお話を伺ったときに、墨象と一緒にできるのかなという懸念をしていたんです。実際に公募の作品を見て、その中には文字を否定したものもあるし、あくまでも文字を大切にしている前衛書家もいるし、いろんな作品があるんだと。それが

今までの私たちが掲げてきた墨象とはぜんぜん違うんだ、広いなっていうような感想が第一でした。前衛書の作品、先生方、出品者も含めて、道展に迎え入れたことをすごく今良かったなと思います。

野坂 実は前衛といっている先生方の中では、あまり違和感は無いと思います。書の可能性を広げていくという中で、こういうタイプの書も出てきた、審査をするときにある程度くくった方が楽なのでくくっているだけに過ぎなくて、私の中では新しいことをやろうと思って書いていれば、どんなものでも前衛書と言つていいんじゃないかと、個人的には思っています。ここから始まりだし、お互いに勉強し融合しながら、更に表現が広がっていく可能性が出てきたという点でいいんじゃないかなって思います。

松永 会場で、墨象のところへ行きましたら、何かこれまでにない書風が風穴を開けたような、清新なすがすがしい空気が流れていてとても楽しめました。面白く新鮮な発想が感じられて、私もインスピレーションを受けるところがあって、嬉しい思いですね。ですからきっと他の部にもそういうさまざまな波が波及していく、影響を与えるかもしれないなっていう期待はあります。

司会 今年の2×6の新設^{*4}は、60回記念展で非常に大きな話題だと思います。

菅原 かなでは、2×6ということで、最初戸惑いがありましたけれども、かなにとってはとても、やりやすかったなっていう感想があります。今回このサイズにも挑戦している人がいるんですが、すごく良かったなと思っています。

本間 単純に2行3行書きの2×6の作品は、縦に流れているように見えるので、いいかなと思います。特に縦長の作品は、現代風というか、今の展覧会場に



大川一濤氏

は合っているのかなあと。2×6の行数が少なくて縦に流れているように見える作品は、いろいろな作品が出てくる可能性を感じて、いいなって思いました。もっと言えば、他にサイズがあってもいいのかなって思います。広がって行くような感じがして、展覧会場でもサイズが違うだけで随分雰囲気が違って見えて、いいなと思いました。

松永 2部では大変に厳しいサイズで、今回1点だけ出品がありました。それで2文字をあの縦長の細いところに書くのはかなり題材を選びに選ばないと、それから造形、構成をしっかり考えないと大変に難しいことで、2×6に限らず2部はサイズに関して一番不利な、どんなサイズにしてもなかなか難しい。いろいろなサイズを増やしてといっても、いったいどんなサイズが合うんだろうって、なかなか難しいことですね。

大川 4部にとって2×6は大歓迎ですよね。いろいろなサイズがあって、いろいろな表現が実験できるっていうことではとても大歓迎だと思います。この2×6はたぶん、1部に大きく刺激を与えたかったんじゃないかなと思います。それは高校生の問題もU23の問題も含めて、1部は結構両方から刺激を与えられているんじゃないかなと思います。

*1 複数出品の復活

公募出品数増により30回展（1989年）から出品は同一部門1点としてきた。出品減対策と表現の幅を広げるために第50回展（2009年）から同一部門2点までの複数出品制に変更した。60回展（2019年）では出品者1200人中107人が2点出品者である。

*2 U23

56回展（15年）から、若手の育成を目的に23歳以下の出品料を設定し、U23奨励賞を新設した。さらに16歳～18歳の出

品料を減額した。23歳以下の入選入賞者も増え、60回展では入賞・入選者の2割が23歳以下となった。なお、50回展で出品下限年齢を18歳から16歳に緩和し、59回展（18年）から80歳以上の出品料を導入した。

*3 前衛書の参加

前衛書家の出品は以前からあったが、部門がなく、漢字部門などに作品を発表していた。51、52回展（10、11年）の墨象部門に前衛書が出品されたが、その後は続かなかった。理事会は検討を開始、59回展から前衛書家を会員、会友に推薦し、前衛書出品を奨励した。60回展では39点が出品された。

*4 2×6の新設

従来の公募作品サイズは2.3尺×4.5尺（全紙）と2.9尺×2.9尺。漢字部門では全紙縦に複数行を制作する出品者が主流だが、会友作品サイズは2尺×8尺のため、会友昇格後は1行書の傾向になり、その弊害も話題になっていた。60回展で2尺×6尺の新サイズを追加し、漢字、かな、詩文書部門を中心に関連作品が160点が出品された。今後、増加することが予想される。なお、会員、会友部門は52回展から4尺×4尺サイズが新設され、表現の幅が広がっている。

2. 未来へ繋がる書道文化とは

司会 まずU23の定着についてですが、若手の育成につなげて道展の出品点数を上げていくという意味では非常に大切であり、重責を担っていると思います。

大川 やはり高校生がこんなに盛り上がっているのを何とか繋げていきたいと思います。ここに大きな壁があるんだけど、何とかそこを乗り越えて、高校生から道展に、書道の世界に繋げていけたらなと思います。それには高校生のうちに道展に出品させて夢をみせてあげる。なんとか興味付けをしておいて、卒業してからも続くようにしてあげたい、ということなんです。

野坂 それについてはどこの立場にいるかで、微妙にニュアンスが違うっていうのは1つありますね。毎日書道展のU23の出品年齢が16歳以上になり、高校生は無理に出すっていうことではなくて、何かそういう条件のある子たちを出す場がある、高校によってそのまま就職する子がそれをきっかけに出すとか、そういう場があるのはいいのかなという気がします。

松永 若い人たちが、道展に関わるのは年1回出品するだけというのが、今現在の状況ですが、もっと道展の方からいろいろな企画を出して、若い人たちに

「書道ってこういう面白さもあるんだ」と感じるような体験をさせてあげられないかと思います。例えば、そうそうたる道展の先生方の揮毫会（きごうかい）を見せて、若い人たちに「こんな書き方もあるんだ」など、より幅広い書のスタイルや世界があるということを実感してもらうとか。

石原 生徒たちと先生方との間で生まれてくる繋がり。その先生との関わりの中で生まれてくる書への歩みなんです。他の先生の書いているところを見せるとか、これは別問題であって、やはりその学校の先生との関わりと仲間という環境が高校生にとっては大きいですね。

松永 勿論、高校生にとって自分の先生の存在は大きいものだと思いますが、道展と繋がって何かしら書は凄いな、面白いなという若い時の鮮やかな記憶が残れば、結果がすぐに出なくても、将来的に芽を出す可能性はあると思います。ですから、先生と生徒の関係にもいろいろな形があるでしょうし、そこだけに閉じてしまうこともないかと思います。

石原 でも、それは絶対的に必要なことだと思うし、それを求め続けます。だからどうであれ、やれなかつたらやれないで終わり。それは書道だけじゃなくて、世の中どんな物事でもそうです。

菅原 私は若い頃に漢字をずっとやっておりました。子どもたちを教えながら、かのことなんて考えてもいなかったんです。ところがご縁があって、かなの世界の素晴らしいものを見たことで、鳥肌が立ったという経験があって、書道の中でもこれだってそのときに思ったんです。それで方向を転換しました。自分の経験上、やはりこれから今それぞれの部での経験を若い人たちがしていたとしても、また将来年齢を重ねてから、書道ってこういう世界もあったんだっていうことの気付きがどこかで機会としてあれば素晴らしいなと思うので、道展で何か揮毫会など、何かを発信して、そういうきっかけがどこかで作れればいいかなっていう思いがあります。

司会 次に先ほどの前衛書の参加で、これからどのような展開があるのか、まず上戸先生お願いできますでしょうか。

上戸 私はどうちらかというと、前衛の作品を見ることによって、墨象の作品はもっと変わっていかないかなならないんじゃないかなと。なぜかというと、書いている私たちもだんだん高齢になってきているわけです。墨象の大きい筆は持てないから、小さい筆にだんだんなっています。実際墨象をやる人たちの年齢も上がってきていることも確かですから。その中



上戸抱山氏

で今まで通り一文字ドンと書いて、これが墨象だっていうようなものだけじゃね、先を考えると無理があるんじゃないかなと思います。今回2部でも1字の作品がありましたよね。それはただ墨象の作品よりも細くてスマートな形で書いているだけで、何ら変わりはないんじゃないかなっていう気持ちはあるわけです。

司会 6部でいうと、刻字と篆刻っていう両者があるわけですね。実際、墨象で行っている審査会と全く同じことを何十年も前からやっているわけなんです。良い先生に恵まれて、そして良い弟子が育って、そのお弟子さんがもう今、審査会員の時代に来ています。過去に名作が道展の中でも出ていて、その名作を見たときに先ほどの揮毫会の話じゃないですか、どうしてもそういうものを作ってみたいという好奇心が、U23でなくとも、例えば30歳40歳でも門を叩いてくるっていう人が展覧会の魅力として、そういう力が魅力ある展覧会じゃないかなと思います。やはりこれは5部に前衛書を参画させるということの非常に大きな発展的な役割、総合デパートのようなもので、1つのデパートの中に全部の部門のいろいろな商品があるのと全く同じだと思います。

野坂 本当にまだ始まったばかりなので試行錯誤がありますし、今のところは一緒に審査はしていますけれど、出品されたものを案分しながら、入選率も全て案分しながら別々の塊として審査している。中には人数が増えていけば独立して別の部門になった方がいいんじゃないかなという意見もあったりね、難しいところだと思いますが、広がりをってことで言えば、ごっちゃに審査しながら、多様化する方が広がりとしては出てくるから、実験的な作品を受け入れる素地のある部門というのがあることが大切だと思って



野坂武秀氏



越坂久雄氏

います。

司会 では、 2×6 サイズの今後の展開ということでトーケーをお願いします。

石原 2×6 の議論というのは、考え方いろいろあってなんですかけれども、1種類よりも多様性を求める。単純にそこから広がっていったと思います。実際に実施してみると展覧会会場は大きく変わったと思います。全く違う風景がそこに見えていると思います。 2×6 が生まれることによって景色がこんなに違うのか。実施したことによって生まれてきたこの風景は、当然深みを帯びてくると思います。いろんな実験の場がここで生まれてくると思います。 2×6 と全紙の両サイズを味わいながらまずは求めていくこと。今、1年目ですよね。3年目で見えてくるものがあります。それからの課題になるのかなとそんなふうに思います。

本間 審査時に先生方も話されていたんですけど、この展覧会の結果を見て、書きやすいというか、全紙とは違う表現ができるサイズだという話は出ていましたね。書き慣れている方は実は結構たくさんいると思うので、その人たちは取りつきやすいだろうし。余力のある人は両方やればいいし、そうでない人はどちらかを選んで、多様な出品の仕方ができる。だんだん 2×6 の作品が増えていくんじゃないかなと。審査をしていた先生方もそうお話をされていました。

菅原 2×6 に関しては、本当に突然の大きさでしたので、初めは少し戸惑いましたけれども、やってみて今後やりやすいかたちも出てくるのかなと思いました。それから、かなに関しては、小字、中字、大字と、それを全部一緒に審査します。貼り混ぜみたいなかたちでいろいろなバリエーションができ、扇面にしたり、紙を小さくしたり大きくしたり、中字を

混ぜたりということもできるので、これから様子をみてみたいと思います。

大川 4部は 2×6 は大賛成です。危惧するのは、他展と同じ作品を出品するケースも考えられますね。

3. 北海道書道展の方向性

司会 移動展は、現状、網走と函館となっています。函館は52回展から道立函館美術館になったということで、地方の活性化について、ご意見いただければと思います。

野坂 帯広はずっと昔にやっていて、いったん中断して、復活したことがあったんですけども、そのあと続かなかったという経緯があります。原因は、十勝にいる人たちの道展参加率の問題があるかと思います。ただ今回前衛の人たちが受け入れてもらったことで、参加率はかなり上がっているので、復活の素地はあると思います。例えば何年かに1回のローテーションであるとやはり非常に賑わうし、それをきっかけに知ってもらうという役に立ちますので、何年かに1回のローテーションであれば地方にとってはいいのかな。

司会 次は、展示スペースについて。今、ゴールデンウィークに展覧会の会期を合わせてやっているんですけども、展覧会は札幌市民ギャラリーと札幌パークホテルの2会場で、市民ギャラリーは2会期あるということです。地方から来るときには、2つの展覧会を見に来るのは非常に厳しいと思います。できれば1つの会場で分割してもいいんですけども、1つの会期の中にまとまれば、非常にいいなと考えます。

大川 僕は、もうちょっと違うことを考えていて、ギャラリーに展示して一般の方々が見に来てくれるのを待ってちゃ駄目だと。つまり、札幌の地下歩行空間に作品を展示するとか。そこから繋がってくる、掘り起こせる人材ってあるんじゃないかなって思います。もちろん、会期を1つにするのも大事だと思います。それから、道新が主催している学生書道展がありますよね。例えば会員展なり、道展の公募展の裏番組で学生展ができないのかな。そうすると道展を見に来た人にも、学生展を見せられるし、学生展を見せてることで、両方がきっと活性化するような気がするんですよね。さっき高校生に夢をみせたいと言ったんですが、そこにも繋がっていくような気がするんですよね。

野坂 今回初めて展示を担当させていただきました。帯広から札幌3往復です。労力も含めて会期をなんとか工夫するとして、会場の問題はすごく重要だと思います。

司会 今回のパークホテルの会友展には515点展示しています。市民ギャラリーの公募展は900点を超えている状態なんですけれど、会員作品と公募と一緒にというとギャラリーがちょっと厳しいんです。会期を1つにするというのは、大きな突破口にもなってくると思います。次に作品の多様化と質との多様性ということで、これからどういう発展性があるのかについて、お願いします。

上戸 墨象の場合、書く場所の確保と準備がすごく大変だっていうんですね。10年ぐらい前までは現役の先生が結構いて、体育館を借りたりして、ある程度書き込みはできたんですけど、最近はなかなかできないので、質的には「この作品は書き込んだな、いい作品だな」と思うものは、はっきり言ってあまりない。確かに書き込まないけれども、素直な線だとか、そういう感じで見ていくしかなくなってきたと思います。

松永 20、30回展の座談会の様子を読むと、20回展すでに組織が大きくなってくると派閥的傾向が強まってくるのは宿命だというように書かれていて、ましてや60回にもなりましたから、更にそれが強まっている。だから多様性がなくなっているといふのは仕方のない流れなのかなというか。道展はせっかくいろいろな系統、書風を持つ幅広い先生方が集まっているわけですから、会員の先生方が系列や部門を越えて、書的に刺激的に交流をするというような場があってもいいのではないかと思います。

司会 大変貴重な意見だと思いました。最後に、書道環

境の変化ということで、年齢層等もありますが、将来的な展望も含めた中で、出席者から1つずつ出していただきたいと思います。

本間 ここにいる先生方は20年ぐらい前から関わっているのだから、その頃にもっと抜本的な手を打っておけば本当は良かったのかなって思います。でも変えるのってすごくエネルギーが要るから、とりあえず前の年と同じことをやっておけばその場はクリアできるんです。いろいろ工夫をしたり苦労をしながらちょっとずつ変えてきてはいるんですが、劇的な変化というのも無理なのかなって思います。高校教育の中で、高校生の出品は、書道部のごく志のある生徒1人2人でいいことだから、結局鑑賞者を増やす努力というか指導というか。見る方を増やしていくようなかたちで、地道な努力を重ねていくのかなって思っているんですけれど。

松永 今、A I が何にでも幅をきかせて、スマホとかパソコンで文字を打って、自分の手で書くなんてことが本当にどんどん少なくなってきているような時代。そういう時代の流れだけれど、自分の体を通して何か自分の手で作るとか書くとかということは、人が本能的にやりたいこと、喜びを味わえる行為だと思います。だから、書に携わっている我々が、周りに書くことは本当に楽しいよ、と伝えていくことが大切だし、諦めないでやっていかなくてはと希望は持っていますけれど。

菅原 やはり私が育ったころは、書道をやりたい人が本当に多くて、盛んな時代だったと思います。今は、なかなか書道をやろうという気持ちになってくれない。もっと新聞を活用して書道の楽しさとか、熱をもって私たちがこういう仕事をしているんだということを発信できないものかと思います。

大川 僕は、展覧会は審査だと思うんです。厳正な審査を公平な目で、そして本気で闘える、切磋琢磨をする場になれば盛り上がっていくような気がするんです。僕らが若かった頃は、そこで鍛えてもらおうと思って作品を書いたわけで、そういう気持ちが持てるような展覧会にしていけたらなと。そうしたら質も上がるし多様性も上がるし、いろんなアイデアが出てくるんじゃないかなと思います。

野坂 環境の変化の中でいうと、インターネットの問題です。自分でも本物を分かってもらうような発信をしなくてはいけないなと思っています。それから、今、小学校に行き教えていて、町内の学校を周って歩いているんですけども、書塾に行って子はほぼいないんですよ。先生方も書けないんですよ。だ

から少しでも楽しい思いをできるようなことを考えながら教えていて、卒業制作を書道でやってみたり、共同作品もやってみたり、墨作りをボンドでやらせてみたり。そういう働きかけを書家といわれる人たちが実は怠ってきた部分だと思うんです。そういうところに道展が裾野を広げる活動をしていける道があるのかなという気はしています。

上戸 実際私も教えている生徒の8割以上は60歳以上なので、そういう方たちに何を教えているかというと、書は楽しいよっていうことなんです。道展の草創期のころは、墨象を全道に広めようという先生方がたくさんいて、毎年1回全道大会みたいなことをやっていたんです。そういうものが実を結び、道展の5部として定着したんだけれども、私たち指導者もそのレールに乗ってきた。だから、ここで一発奮起してもっと広めていくための何かをしていかなくてはならないだろうなっていうのは、常日頃思っています。

司会 はい、ありがとうございます。今、活発に交わした意見がまた次の世代に残っていくように願っています。石原運営委員長にコーディネートしていただ

き、座談会を運びました。では、最後に締めていただきます。

石原 道展という今のかたちがあることは奇跡に近いと思います。全国をみても、こういうかたちで集えることは、貴重なことだと思います。それを支えているのは人と人との繋がりです。人との繋がりはどこで生まれるかというと、道展、その存在だけで生まれてくるものではありません。それぞれの書活動によるものだと考えます。たとえば、大きい小さいは関係なく、お互いに展覧会へ足を運ぶ、その中で人と人との関わりというものが生まれてくるわけです。地道な歩みの中で生まれてくる人間関係。手を差し伸べる。相手を認める。全てはそこから始まります。

道展という存在、これだけの多様性を持ち、会派を越えた存在で集える書道展、これはやっぱり注視したい。誇りに思いながら、歴史を尊重し、その中で現代性を求め、新しい可能性をこれからも皆さんと、歩みの中で探り続けることができればと思います。本日はありがとうございました。

